

清代禁書

——その著者たちの思考——（上）

岡本さえ

目次

序・表

第一章 禁書内容の特色

第一節 明清交替期の比重

第二節 致用主義

第三節 史学重視

第四節 存在と認識

第二章 反満意識

第五節 満人観の変遷

第六節 反満意識の構造

第三章 異端思想

清代禁書

——（前半）——

第七節 明末清初の異端論争

第八節 著者たちの思考様式

第九節 思想史に占める禁書の位置

序

清代禁書は一八世紀後半（一七七四—一七八八年）に清朝当局が検閲し銷燬を命じた書物である。《晚明史籍考》によれば二四回、一三八六二部を数えるという。ところでこれらの清代禁書が実際に書かれ、刊行され、中国の人々に影響を与えた時期は、乾隆年間になってからとは限らない。早いものは、唐・宋代に遡るし、遅くとも一八世紀前半には読まれていたのである。

「禁書」となった時期よりもはるか以前に活躍していたこれらの清代禁書の著者たちはいかなる時代の精神を表現し、いかなる意識を有していたのだろうか。死後その思想が、或いは満人王朝に「詆触」したと非難され、或いは「風氣を破壊」したと異端視された著者たちは、生前何を訴えようとして執筆したのであろうか。

私たちは清代禁書の著者たちが決して一定の思想的立場に立っていたのではなく、さまざまな対立・相剋をくり返し、清朝から忌避されるよりも先に互いに異端邪説の烙印を押しあっていたことを忘れてはなるまい。むしろ一八世紀以前の士大夫グループについて個別研究を進めた場合に、清代禁書という一つの巨大な場において士大夫たちが出会うのを見ると述べる方が正確である。対立しあい異質の思考を有した著者たちが、しかもなお清代禁書という共通

の場に見出されるのはいかなる理由によるのであろうか。

本稿は禁書著作を生み出した人々の思考を追跡することを目的とする。それ故、清代禁書を制定した当局の思想統制の歴史は研究の対象としない。

清代禁書目一覽表

次に掲げる書目は 姚覲元編・孫殿起輯《清代禁燬書目・清代禁書知見録》、一九五七年、上海商務印書館、三四一—二五二七五十六 p. による。下欄の数字は各書目に収録された禁書の部数を示す。

①	清代禁燬書目	全燬書目	一四六
②	"	抽燬書目	一八〇
③	"	禁書總目	七二三
④	"	軍機處奏准抽燬書目	二七二
⑤	"	浙江省查辦奏繳應燬書目	一五三
⑥	"	外省移咨應燬各種書目	三五四
⑦	"	違礙書目	七〇三
⑧	"	統奉應書目	五〇
⑨	"	補遺一	五六九
⑩	"	" 二	四一四

⑪ “ ”

一〇三

⑫ 清代禁書知見錄

一三九一

⑬ 清代禁書知見錄外編

四〇四

第一章 禁書内容の特色

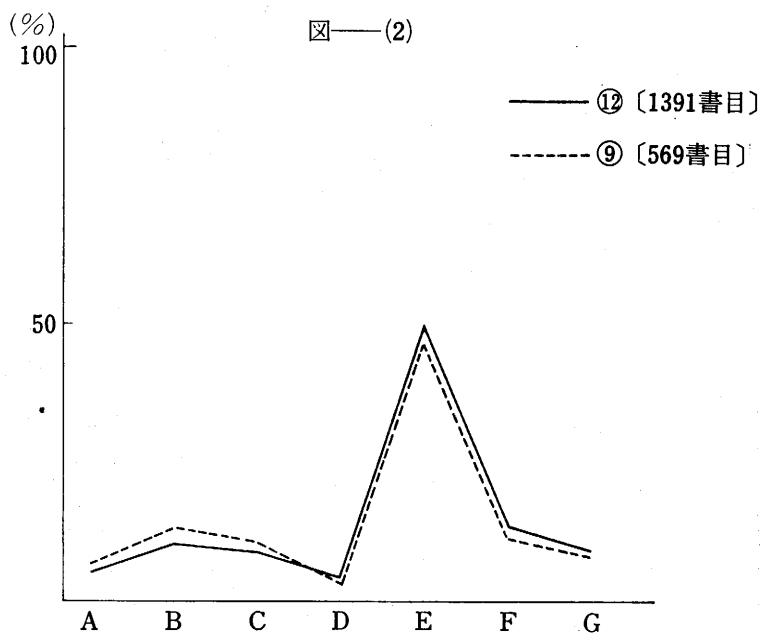
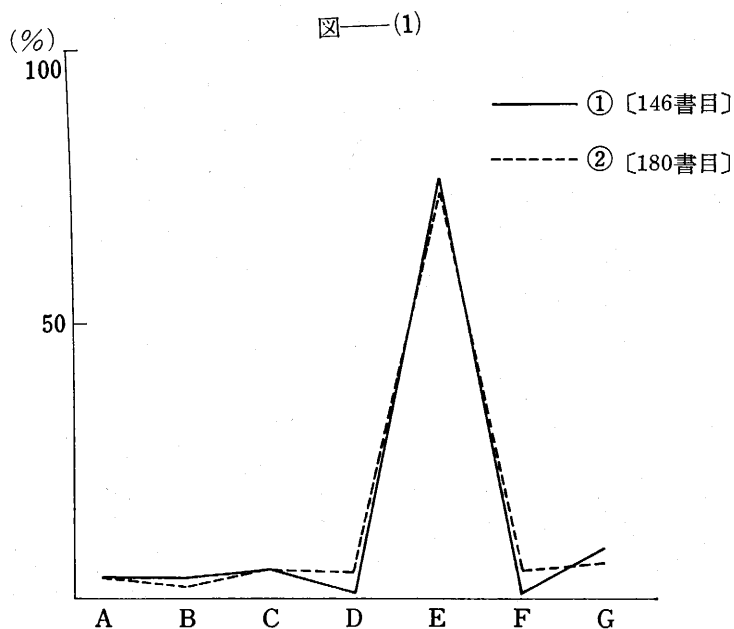
第一節 明清交替期の比重

清代禁書の内容を概観するため禁書を次のように分類し、各々の作品がどの分野にあてはまるかをまず検討したい。

分類項目

- A 軍事（辺境、異民族、戦争、技術、地理等）
- B 内政（経済、政治、典則、奏疏等）
- C 歴史（国史、野史、地方志等）
- D 人物（列伝、伝記、年譜等）
- E 文学（詩集、文集、戯曲、随筆等）
- F 学術（経学、宗教、図書、論叢等）
- G その他（雑組・評録・記事等で分類不能なもの、A—Fの内容に属すが一六・一七世紀に無関係のもの、内

〔A—Fは編著者、内容、刊行時期の少くともいずれかが一六・一七世紀に関係あるものと定める。〕



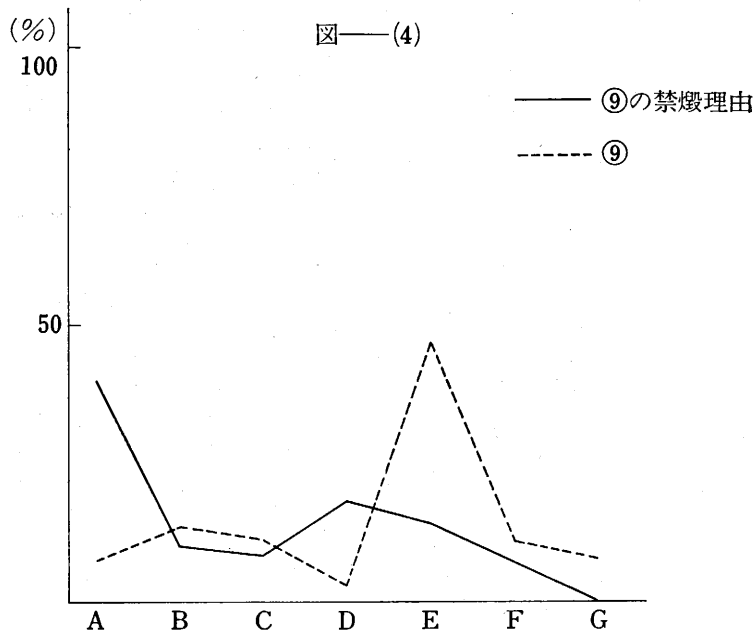
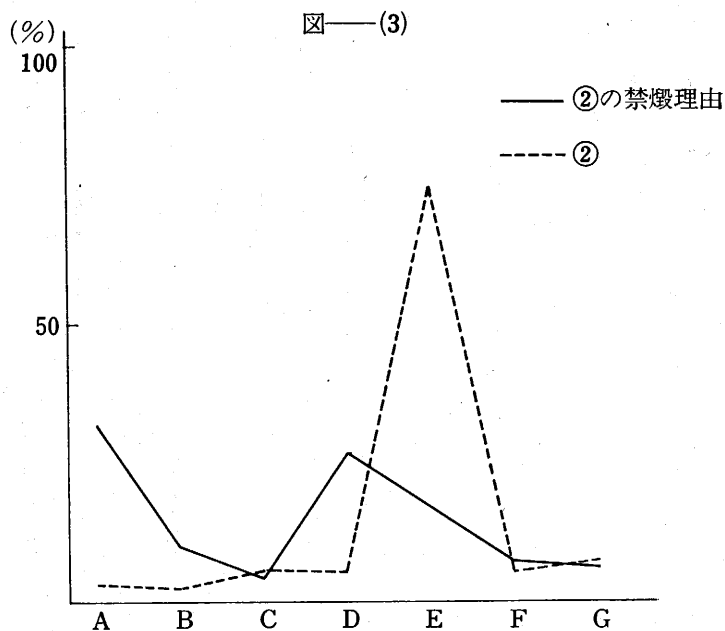
容不明のもの)

例えば一覧表の書目①②および⑨⑩における各作品をA—G項に分類し、その分布をみると右のように図—(1)、図—(2)を得ることができる。

図—(1)(2)によるとE(文学)項がいずれも圧倒的多数を占めるがこれは禁書書目の多数を占める個人の作品集たる文集をすべてE項に分類したことによる。だが個人の作品集をE項に入れることは次の二つの弱点をもち、図—(1)(2)を不完全なものにしている。第一に、士大夫の文集はたしかに文人としての仕事を世に問うために編集されたものが多いがその内容がE以外の項に該当する場合がある。例えば艾南英撰《艾千子集》の内容はすべて奏疏から成り立っており、本来B項に入るべきである。第二に一六・一七世紀の士大夫の関心が多極化し百科全書的であり、従って作品集の内容がA—Eのいくつかの項にわたる場合が多いことである。

ところが一覧表の書目のうち禁燬理由が付記されている②⑨について、その禁燬理由をA—Gまでの内容別に分類してみると図—(3)、図—(4)を得ることができる(実線は禁燬理由による分布、点線は図—(1)(2)の場合と同じく書目による分布を示す)。

図—(3)、図—(4)で判明することはE(文学)項が著しく減少し、その減少分を補う形でA(軍事)、D(人物)項が増加していることである。とりわけこれらが禁燬理由の一、二位を占めていることに注目しよう。禁燬理由とは乾隆期清朝当局から見た禁書の特徴——しかも清朝にとって都合の悪い——であり、禁書内容の特色と一致するとは限らない。だが禁燬理由の分布においてE項——例えば文学的発想や表現——が前面に出ることが少くなりA項が増加したことは、個人の作品集や詩文集が一六・一七世紀の軍事や辺境(具体的には遼寧や満州族)をテーマにするケースがきわめ

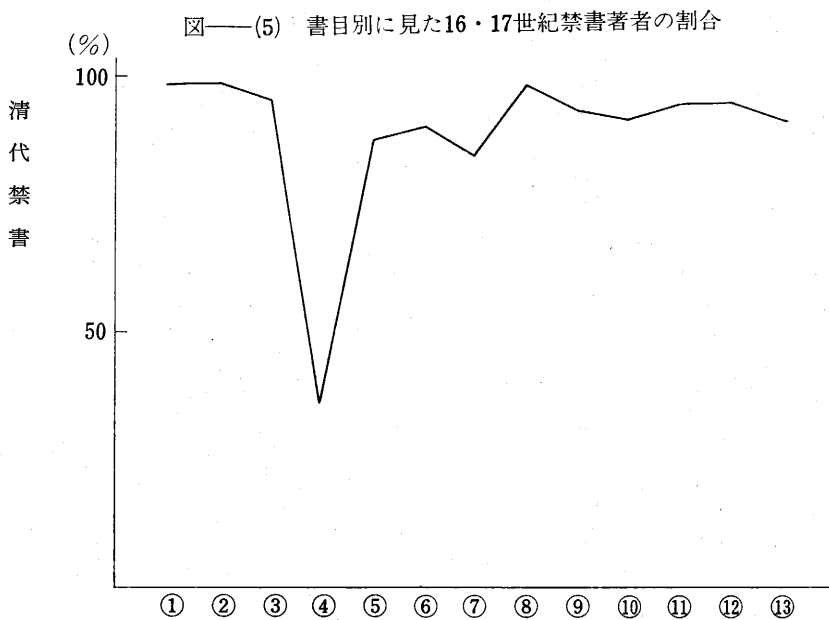


て多かったことを示すものといえよう。またD項の増加については、A項の増加理由と同様に明朝の遺王や殉臣について述べた詩文集が多かったと考えられるほか、清朝からとくに反満思想の持ち主として危険視された数人の文人——例えば錢謙盛（受之、牧齋、一五八二—一六六四）、屈大均（翁山、介子、華夫、一六三〇—一六九六）、呂留良（莊生、晚村、一六二九—一六八三）——が原因になったと思われる。すなわち、清朝はこれらの文人の作品集はむろんのこと、彼らが他人の作品集に贈った序文や詩などもすべて銷燬するよう命じたから多数の書がこれらの「人物」の片言隻句を収めただけで禁書になったのである。したがって禁書における『反満意識』の検討は——その内容が清朝当局の指摘と相違していても——著者たちの思考を追求する上で重要なテーマとなろう（第二章第五・六節参照）。

なお、E項が減少したとはいえ、F項と合計すれば文学・思想関係は禁燬理由の1/4を占めている。このことは、満清支配に抵触し反満とみなされたA—D項の諸理由を除外しても、なお「悖妄」「輕浮」「明季惡習」など思考内容の故に『異端』呼ばわりされた作品が多数存在したことを示している。後述する如く（第三章第七節）漢人士大夫たる禁書著者の間で異端論争が頻発し、しかも彼らの作品が一括して清朝に異端視されていることを考慮に入れると『異端思想』もまた『反満意識』と並んで禁書著者たちの思考への視角となろう（第三章第七・八・九節参照）。

次に、これまでの図(1)―(4)によって、G項が一割以下であることから一六・一七世紀に無関係な禁書は、書目内容の分布によっても禁燬理由の分布によっても少数であると指摘できる。G項は分類不能或いは内容不明の書を含むから、これらを差引けば明末清初に無関係な作品は全禁書の5%以内と考えられる。この点から、禁書著者（内至編者）が注目していた時期は明朝の衰亡期・満州族の中国征覇を中核としていたといえよう。

それでは禁書著者自身はいつの時代に活動したのか。禁書書目一覧表の①―⑬についてその著者名を見ると「明」



の字が冠せられた人々が圧倒的に多い。そこで各著者の活動期を調べて書目別にまとめると上図—(5)が得られる。図—(5)によって禁書著者の分布もまた一六・一七世紀に集中していることが明らかである。すなわち書目④を除く全書目において、著者の八割以上をこの時代の人々が占めているのである。「書目④は尹嘉銓（了端、随五、古稀老人、一七一—一八二）の作品を集中的に収録している為に四割台に落ち込んでいる。」

以上の調査から清代禁書の著者たちは、自らも明清交替期に生を享け、且つ明清交替期——彼らにとっての「現在」——を思考活動の対象としていた士大夫であったと断定することができる。そこで次に、明末清初の禁書著者たちの思考内容をA—G項にわたる彼らの作品によって追求することとしよう。具体的な順序としては、第二節（致用主義）でA・B（軍事・政治）項を、第三節（史学重視）でC・D（歴史・人物）項を、第四節（存在と認識）でE・F（文学・思想）項を中心として検討したい。

第二節 致用主義

北辺の満州族が強大化して明領を侵蝕し、李自成の叛乱による明滅亡の機に乗じて全漢民族を支配するに至った過程は、明清交替期の漢人士大夫にとって最大の関心事であった。この事実を各々の境遇に応じて認識し、且つ対応策を講じた士大夫たちが二世紀も後に禁書著者として満州族に弾劾されるに至ることは第一節で見た通りである。この節では、主としてA（軍事）B（内政）に関する禁書に依拠し、C—E項にわたる禁書をも参照しつつ、禁書の著者たちが激動期をいかに把握し、且ついかに対処しようとしたか、彼らの行動を貫く意識はいかなる特色を有したか、について検討したい。

清朝の前身である「建州女直」の勢力が急速に延びていることを明朝士大夫が確認したのは一六一八年五月九日（万曆四十六年四月一五日）撫順城が建州女直の軍勢三万の前に殆ど抵抗もせず陥落・炎上したのに続き、九月にも義州東北の清河城の守備隊六千人が全滅し、翌年三月（二月）一氣に敵陣を粉碎すべく遼陽を四路に分れて出た一〇万の明朝討伐軍が、大雪で行程を狂わされた上、情報が洩れ待伏せに遭って壊滅状態となり、この「四路大敗」の報が中国全土をかけめぐった時であった。

遼東における女直の反乱は一五世紀初から記録されており、開原や瀋陽が侵犯されたこともあった。しかし禁書著者である趙輔（良佐、恭肅、一一四八六）や馬文升（負図、三峯居士、端肅、一四二六—一五一〇）〔以下、傍線を施した人名

はすべて禁書著者である」によれば、「防胡」の戦いは渾河以東の「虜地」深く明軍が攻め入って行われるのが通例であり、明軍は朝鮮の援軍をも得て「長驅席捲し、向かう所敵無し」という強さで、「一ヶ月以内に虜境は肅然」となるのであった。すなわち一五世紀においては「北虜」が中華の恩に悖って寇を累ねた場合に「天威が震怒して」皇帝が華夷の別を天下に示す、という理解が禁書著者に普及していた。一六世紀に入って開原―広寧を結ぶ各地には数年おきに「乱」や女直の「突犯」があつたが禁書著者たちはこれらを「迅雷烈風」の如くごく一時的に被害をもたらすものと受けとつていた。城市が陥落したためしはなかったし、馬森（孔養、鍾陽、恭敏、一五〇六―一五八〇）は「要は城池・辺堡・墩台・壕塙を修理し、保障を嚴重にすることにある」と現状維持に力を入れた。高拱（肅卿、文襄、一五一二―一五七八）は一五七三年末、《辺略》⁽²⁾（波線を施した書名はすべて清代禁書を示すものとする。なお、書名の後の数字は一覧表（四七・四八）の書目番号であり、各々の禁書がどの書目に属しているかを示している）の自序で「西敵は頭を地に付ける礼をして臣下と称しており、東敵は武器を棄てて首を刎ねられる」と述べ、次いで「国家は時まさに全盛期であり自力で四夷を鎮圧し馭することができる。いわんや（裔孫どもは）降服し叩首の礼をとって臣下と称しを貢を納めんことを請うている。……彼「方」はすでに我「方」に屈服した。……ゆえに直ちに受けいれてこれを封じてやれば、「四夷みな」輿図の外には「在り得ない」ことを示すことができ、荒々しい獷どもがみな従うことをあらわし、天朝の尊さを完全なものにし、中華の気を伸長して九彝八蛮にその評判を聞かせ、さらに彼らの威を畏れ帰服する心を堅くさせることができる」⁽⁴⁾（伏西紀事）と周辺国に君臨する姿勢を明示した。とくに遼東の動きについては「……東敵はなおもひそかに「中華を」窺っている。もし遂に志を得れば陰で西敵を煽って驕心を起させるかもしれない。貢市を得ているとはいえ「これを、東敵を捉えておく」鳥網と做すには足らぬ。必ず「東敵には」大きな一撃

を加えて慥かねばならぬ。そうすれば北敵の心胆を凍らせるばかりか、西敵もみな、畏まって貢市を行ってこそ長らえることができる⁽⁵⁾と知るだろう」(安辺紀事)と記している。この要請に呼応するかの如く当時李成梁(汝器、銀城、寧遠伯、一五二六—一六一八)が常勝將軍として一六世紀末の建州地方を治めていた。それゆえ、一五八九年頃からの奴兒哈赤(努爾哈赤、清の太祖、一五五九—一六二六)の抬頭についても明朝は遼東守備の世襲職が増加したと受けとったに過ぎず彼を都督に任命している。

一七世紀に入ってはじめて北辺での防衛線の範囲をめぐって朝廷ならびに遼東守備の高官の間で議論が生じた。議論は防衛範囲の拡大を主張する側と、重点守備を主張する側に分れ、前者は開墾地すべてを明領とみなし広域を支配し敵の本拠地を潰すことを主張した。禁書著者では《掖垣封事》③④の撰者宋一韓(当時の兵科給事中)や、《酌中志》⑤の著者で太監の劉若愚らが前者即ち広域支配論者に属し、すでに一五九五年頃寧遠伯李成梁が推進した「遼土徙民」——順河以東の居民を遼鎮各衛に遷徙させ、建州女直との間に絶縁ゾーンを設けることにより建州女直の経済的基盤を奪う政策——を「棄地」と呼んで遼東巡按熊廷弼(飛白、芝岡、袁愍、一五七三—一六二五)たちを疏劾した(一六〇八年)。これに対して後者、すなわち拠点守備を主張する側は、防衛ラインを延ばすことは辺牆修築のために莫大な人財を徒費ししかも虜衆が大挙して来襲した場合には扼塞は不可能であると考え、むしろ遼河以西の拠点を固守して建州女直の入犯を機に痛撃を加えるべきであると述べた。拠点の外辺では屯田の私有化を認めて遼東居民に明朝の恩恵を感じさせ、夷を制する状況を作ろうとしたのである。後に遼東経略になる熊廷弼(前出)、朝鮮での日本軍撃退に寄与した袁黄(坤義、了凡、兩行齋、一五八六年進士)たちがこの意見の推進者であった。

このような対立があったとはいえ、一六一〇年代に入ってもなお禁書著者たちは北辺の「扼塞」について危機感を

示していない。当時、礼部尚書の馮琦（用鑑・琢菴、文敏、一五五八—一六〇三）や《四夷考》③④の著者、大学士葉向高（進卿、文忠、一五五九—一六二七）たちが「朝廷の礼制、人事、経籍子史、礼樂兵刑から財政、税務、扼塞の分野に至るまで、耳目で聞見することは概要委細、委く具わっている」〔軍事・国政の機宜、華夷の境界防備に至っては不備な点がない〕と称えていた《穀山筆塵》⑩《說史漫錄》②の著者・于慎行（可遠・無垢、文定、一五四五—一六〇七）は次のような「夷考」を述べる。「本朝の輿図は（前朝の）元はおろか漢・唐〔の輿図〕に較べても、やはり及ばないところがある。東面の朝鮮は、漢の玄菟・楽浪、唐の安東都護府である。西面の哈密は、漢の安西、唐の四鎮〔の一つ〕である。北面の河套は、漢の五原、唐の豊州勝州等である。南面の交趾は、漢の九真・日南、唐の五管の外境である。朝鮮は公州に建国した。遼陽旧城は、遼左を控え、京師に通じる。河套は二衛に占拠され、哈密は西虜に占拠され、交趾は吐魯番に侵された。獲得したり失ったりした結果〔本朝の輿図〕を漢・唐に比較すると、四幅が剪られたことになる」〔⑧〕。いぜんとして夷によって「本朝」の屋台骨が揺さぶられることは夢想だにしていなかったのである。

北辺守備に関する禁書著者たちの心配はといえば、守辺の明軍が安泰に慣れ切って激戦に耐えられないのではないのか、という点であった。「将吏」は飽衣飽食、「士卒」は選練された者でなく、しかも疲弊している、という指摘は繰り返し行われていた〔⑨〕。

本節の最初に述べた如く明朝士大夫にとって最初の衝撃となった撫順陥落（一六一八年）は、数年前の守備論争を再燃させた。広域防衛論者たちは原因が建州棄地——とくに「一夫当関、万夫莫開之險」といわれた喜昌口、鴉鶻関を李成梁が棄てたこと——にあり、「膏腴之地」を建州夷に委ねた結果、彼等が叛心を抱くに至ったとしていっせいに

拠点守備論者を攻撃し、ただちに討伐軍を派遣するように要請した。同年、楊鎬（京甫、鳳筠、一五八〇年進士）が経略遼東に起用され、翌年春「四路出塞」となった（結果は大敗、楊鎬は下獄）のはこの論者たちの主張を明朝首脳部が採択した結果といえるだろう。

万暦末のこの二つの敗北は、続く数年間の建州女直（一二一五、清と改めた）の急速な伸張と明の敗退——開原（一二一九年）、鉄嶺（一二一九年）、瀋陽（一二二二年）、遼陽（一二二二年）、広寧（一二二三年）——の先触れであったが、明朝士大夫たちが北辺について委しく知る必要を痛感した最初の時期でもあった。四方を異民族に囲まれている中華がその一辺として認識していたにすぎなかった北辺は、突如として聖朝の死命を制する地点となったのである。士大夫たちは、はじめて建州女直の民族的起源と明代におけるその発展を知ろうとした。彼等は個人の力で遼東の地図を作り、防衛拠点と補給路の存在を確認しようとした。また、敗因を卒直に分析し、明朝の無策を反省し、富国強兵へ向けて具体的な辺防策を提案するに至った。例えば、茅元儀（止生、石民、一二二九？）は一二二一年、大著《武備志》⁽¹⁰⁾⑤によって軍備を総合的に検討し、数年後の明軍の巻き返しを一時成功させる孫承宗（稚繩、愷陽、一五六三—一六三〇）に深い影響を与えた。茅瑞徵（伯符、荅上愚公、滄白居士、一六〇一年進士）も同年、《東夷考略》③⑨を著わして女直の歴史と辺境図を示した。後年作品の大部分を禁燬されるに至る文人陳繼儒（仲醇、眉公、麋公、一五五八—一六三九）は一二二三年、「建州攷」⁽¹²⁾を著わし、簡潔だが具体的な対策を述べているし、陳子壯（集生、一六一九年進士）は明初からのすぐれた「辺務疏」を《昭代經濟言》⁽¹³⁾⑪に集めた（一二二六年）。一二二七年に執筆された方孔炤（潛夫、一六一六年進士）の《全辺略記》⁽¹⁴⁾③⑨も遼東の歴史と情勢分析に欠くことができない。

右記の士大夫をはじめ、多数の禁書著者が共通して主張したことは「学に務める者は用を致すべし」という致用、

実効への欲求であつた。茅元儀（前出）はいう、「国家が命を受けて以来、平和を享けて二五〇年になるが、士大夫はこれに貢献したことがない。その精神は理学、詩歌、文章、博物の分野に雑然と表われている。ところで平民は〔士大夫の〕下に在り、ここぞという時に頭角をあらわすことができないし、また、あらわすにしても士大夫が喜ぶようにするのだ。……人はまだ〔自分が〕知らない〔分野の〕ことで人を知ることが出来ず、すでに知っていることと同じであれば喜んで、〔相手を〕賢いと做す。だから朝野の間に兵を知る者がいないという事態になるのだ。その上、昔は文武の途は合致していたから仕官する者もまた文武双方〔の官〕を交互にやつた。交互にやればおのずと双方に巧みにならざるを得ない。いったい学問は本朝になつてから〔文武を〕水火のように区別し始めたのだ。そうして洪熙・宣德（一四二五—一四三四）年間以来、文官の権力はより一層、日ましに重くなつた。そのため無知な者が〔士大夫の〕知るべきことを規定し、学問を制限し、実効をあげることを咎めた。だから東胡が突然勃興すると士大夫は顔を合見せてあわてふためき、文士が袂を投げて言うことには、甲冑をつけ馬を馳けさせることが出来る武人はすぐさま將にしてやる、と。上の者が下の者をこのようにして求め、対応策といえるものも無いにひとしい。何もしないで厚顔にも神の名を呼ぶが〔こんな態度でいて〕神明がその人に降るのだらうか。あゝ、一人の人間が〔文武〕両道をも具えていない〔から、かくもうろたえる〕のだ」⁽¹⁵⁾。

進士出身の士大夫から出たこのような自己批判は、中華の文明に自信をもちすぎた明朝人が、周辺諸国が中華を慕い模倣する状態が続くと考え、中華の方式（法）や条約（款）を無視する蛮人どもへの警戒を怠り、武力を磨かなかつた、という反省から來ていた。さらに、それは、明朝の屈辱を雪ぐにはもはや中華の伝統に頼れぬ、実効を第一にした軍事学——技術（術）であれ、方式（法）であれ、武器（器）であれ——を採用せねばならぬという危機感を士大

夫が持ち、實用主義へと踏み切った第一歩でもあった。とりわけ前世紀以来、東南アジア諸国との貿易を通じてポルトガル人やオランダ人の東アジア進出を知り、海防館、督餉館を設けて交易する一方、密貿易取締りの必要から澳門、厦門、澎湖島沖で彼らと交戦し「仏郎機」「紅夷砲」の「驚怖」を身をもって経験していた南部諸省の官僚たちは、実戦の勝利のためには「器」「物」に惜しまず国費を投じ、それらを充分に駆使して実効を挙げる「備物致用」が不可欠なことを知り抜いていた。これらの「先進地域」出身の士大夫層から、当時ヨーロッパの知識人で中国入国を望んで来航した宣教師に「西法」「西術」を学び「西器」を中華のものにして辺防に活用しようと考えた「西学」派の禁書著者が輩出したのである。上海出身の徐光啓（字先、玄扈、一五六二—一六三三）、仁和の李之藻（振之、我存、一五九八年進士）杭州の楊廷筠（仲堅、淇園、泌園居士、一五五七—一六二七）、晋江の何喬遠（穉孝、匪莪、一五八六年進士）、福唐の葉向高（前出）らがその中心人物で、徐光啓は「四路大敗」の翌年（一六二〇年）に早くも次のような疏を出している。「勅して速やかに天威を暢ばし、仇敵を靖す事を御採用になりますようお願いします。私（徐光啓）が思いますには「李之藻の申す」火器の一節は、もとより国庫金は費わず「火器の出費のために」防衛公費を横取りなどしません。戦争と防衛には裨益すること甚大です。……今、瀋陽・遼陽を暫時失い（両城の失陥は一六二二年だが二〇年以前にも侵犯された）首都は驚きおそれています。私は旨を奉じてお召しにあずかり利器を磨いて敵を待つておりましたところ、私の非才にもかかわらずいまいしがた軍需の事で未了任務を補充することになりました。くり返し思惟致しますのにこの「火」器を用いないとすればこの上、いかなる器が有るのでしょうか。この時に発言しないとすればこの上何時を待つのでしょうか。」⁽¹⁶⁾徐光啓の方針は広東から大砲を輸送し、各營の歩兵（三〇〇〇—四〇〇〇名）の過半数に銃を持たせ、嘉定出身の孫元化（初陽、一六三二？）王徵（良甫、葵心、端節、一五七一—一六四四）ら「西法」に習熟している士

大夫や朱大典（延之、未孩、一六〇六年進士）熊文燦（一六〇七年進士、鄭芝龍を無し南部沿岸を治めた）等有能な道臣・兵学者を登用して兵を募らせ、指揮をさせる、そうして有効な使途にはどしどし財を用いるが、無能な将、無用な兵は削減する、というものであった。西学派の士大夫たちは「備物致用、立チテ器ト成シ以テ天下ノ利トナス」といふ易の繫辭伝の句を彼らのスローガンとして緊密に協力し大小銃・火薬、車輛・起重機、等の製造、堡壘・城の修築を行った。前述の陳繼儒は火器に朝待を寄せ、「嘗つて典籍を考えるに唐・宋代は〔虜を防ぐのに〕火器がなかった。わが明朝だけが火器を所有している。若し、我方の長所に精進して虜の短所を攻めることが出来るとすれば、この火器による征伐である⁽¹⁸⁾」。と一六二三年に説いている。

士大夫たちにひろがった実用主義・実効主義は、朝廷内にも影響を及ぼし、従来の、入貢を認める代りに掠奪しないという欺を外夷からとりつける羈縻政策や、満州族や入植者から賄賂を受取りながら朝廷には増餉、援兵を催促していた辺臣の腐敗を一新する動きをもたらしした。大学士孫承宗（前出）は、一六二二年末、実戦に耐え得ない「逃官・逃将をつとめて一掃して天下の心を洗い、天下の耳目を一新する」（力去逃官、以洗天下之心、而新其耳目）必要を力説し、指揮官に人材が居れば将兵は強くなると述べて猛將で鳴らした毛文竜（鎮南、一六二九、袁崇煥（元素、自如、一五八四—一六三〇）、魏雲中（定遠）、西学派の孫元化、《督師疏草》⑤《行辺疏草》③⑦⑨の著者・王之臣（遼で皆死ぬ気の将）等、計一二名を推挙した。次に彼は「奴酋が未だ到らない」寧遠を中心に付近二〇〇里内を強力な基地とし、敵が敬遠するような実績と威力を示すべきであると提案した。孫承宗の主張は天啓帝に認められ彼は原官のまま督理関城及薊遼天津登萊軍務に任命された。一六二六年二月の寧遠勝利、敵將奴兒哈赤（前出）の負傷は、実用主義を推進し火器の威力を説いてきた士大夫たちにとって待ちうけていた瞬間であった。方孔炤は前出の《全辺略記》

の「大明師中年表」でこの年を「征遼」の年とし、「奴酋は寧遠を攻めて敗走した」と記しているし、姚希孟（孟長、現聞、文毅、一六一九年進士）は「中国の火器はこれ迄有したことがないものである。これこそ天が聖威を壮んにしているゆえんである。すなわち、火器が興ってからというものは、矛鉞（鉞は鉄把の小さい矛）や刀劍の用はよもぎの莖に等しくなってしまった。」と大砲の威力に朝待をかけた。また、陳仁錫（明卿、芝台、文莊、一六二二年進士）は、「三説ヲ破リテ奴巢ヲ擣スルノ議」で、「今誠に「遼左を」恢復する計を為すのなら、奴巢を擣さねばならぬ」と積極戦法を主張し具体的には「兵船一〇〇〇隻を造り、精銳の兵を選りすぐって智勇胆略を兼ねた名將に指揮させ天津・山海関に潜ませる。そうしておもてむきは陸兵数万を三岔河の間（遼河下流で三本の河が合流している流域）に出兵させ其の壘を高く其の軍旗を赤くして渡河する勢いを示せば奴は必ずよろいを固くして我軍を拒むだろう。そこで我「方」は海軍を潜かに鴨綠江に抵らせまっす其の巢穴をたたく。東江の兵を率いて遼の四衛を収め、さらに朝鮮の軍隊と期を約して奴の心臓や腹を攻める。三方から並行して進軍し水陸はさみうちにする。此の時奴が帰ろうとすれば陸兵はその後に尾く。奴が戦を望んでも我「方」は已に其の巢を潰してある。奴が逃げ回ろうとすれば毛「文竜の」兵が其の右翼を衝き、朝鮮軍が其の左翼を截るから「奴の」勢力は必ず四分五裂となる。」と提案した。⁽²¹⁾

しかしながら実用主義に立脚して有効な軍事策を実施し、満州族や領内の叛乱勢力に対抗しようとした士大夫たちの積極性は、絶え間ない朝廷の内紛の影響で優秀な軍事指導者の政治生命が奪われたこと——熊廷弼（一六二三年処刑）、孫承宗（一六二五年辭職）、袁崇煥（一六三〇年磔）、孫元化（一六三二年処刑）、熊文燦（一六四〇年処刑）、さらに崇禎年間に入って山海関最寄りの自然境界である大凌河をも失い（一六三〇年）、従来は殉死か敗走かが通例であった明將が武器もろとも敵陣に投じたこと、⁽²²⁾によって次第に下降線をたどっていった。崇禎元年（一六二八年）に前任者熊廷弼

に代り経略遼東になつ兵部尚書王在晉（明初、一五九二年進士）はちょうど一〇年後に『三朝遼事実録』⁽²³⁾③⑨を記し、苦心して曾って構築した大凌河東部の関を自分の後継者が一戦も交えずに敵手に渡してしまった悔しさと、その「大凌之役」が明朝に大きな禍いをもたらしたことを追懷する。「遼士は失陷し、英雄は気概を失った。或いは良計があるのに機先に昧く、或いは間違えて事をこわし、或いはよしあしを批判して刑に死し、或いは身を犠牲にして敵に殺された。災難は多く、見わたすところ「英雄は」一〇人に一人も生き残っていない。忠義を守って国に殉じたのだ。ところが文武正副官および補佐達、多数にのぼる当事者は罪を掩いかくしている。蓋し、罪過は朝廷の側にあるのだ。その上「英雄は」諫めを拒んで咎めを受け、姓名も未だに顕彰されず草木同然に朽ち白沙黃壤の怨鬼となつて泣き叫ぶ、……「だが」簡史にも其の人は知られない。且つ巳午以後は邸報も伝わらず識者も聾盲同様だ。」

一六二〇年代前半の士大夫たちの、全中華への奮起呼びかけと打つて変つて崇禎年間の明軍の最高責任者がこうした絶望感に打ちのめされていたことは、問題が軍資や將兵の不足以前に士大夫の精神的動搖に在ったことを示している。富国強兵への士大夫の努力は形骸化した政治機構と一貫性を欠く政策の前に虚しいものであることを当の士大夫たちが知つたのである。入植や欺で得た豊饒な遼地、軍民の汗と血で築いた堡や城は一度襲われるとこれらを簡単に諦めてしまい、次々に敵の拠点になつてしまった。苦心して開発し改良を重ねた火器は、操法に熟練した將官に携えられて敵の手に渡つて行く。「器」と言い、「法」と呼んで求め続けた武器や技術は、敵の「用」に資するためであったのか。聖朝の臣である自分たちはこうして自ら死を招いているのか。

辺境では大敗を重ね、且つ中華の内部は叛乱勢力に侵されつゝある明朝の、支配層の一隅になおも身をおきつゝ、禁書著者たちは「用」を致す場に何処に求めるか、いかなる分野で実効を挙げることができるのか、再考する必要に

迫られたのである。

形勢の悪化にもかかわらず、「平夷」「禦虜」の決意を披瀝し続けた人々はいぜん残っていた。東林党・復社などのメンバーで崇禎初の奄党失脚により息をふき返した文人たち——左光先、黄道周（幼玄、石齋、忠烈、一五八五—一六四六）、艾南英（千子、一五八三—一六四六）、劉宗周（起東、念台、忠介、一五七八—一六四五）、吳忠箕（風之、次尾、忠節、一五九四—一六四五）等——である。この人々は宋代の岳飛（鵬舉、一一〇三—一二四二）や李綱（伯紀、梁溪、忠定、一〇八五—一二四〇）のような名將・忠臣が明朝にも出現することを望みつゝ、遼東防備の策を練った。吳忠箕は《樓山堂集》⁽²⁵⁾⑤⑫の中で兵事策を講じ、ゲリラ戦を得意とする寇に対処するには拠点守備を強化すること、□（原文伏字、夷または虜、満州族を指すと思われる）に対しては各辺の衝で台堡を修理し、慎重に斥候を出し、屯田を応援するという持久戦を提言した。左光先は《宋李忠定公奏議選》⁽²⁶⁾⑥⑫を刊行し、李綱の積極論を捨てて講和を求めた宋が金に敗れた経過を説いて士大夫の奮起を促した。また左光先の兄左光斗（遺直、浮丘、滄嶼先生、忠毅、一五七五—一六二六）の獄死を惜しみ、彼の上奏文——「急ギ遼東ノ飢寒ヲ救ウベキノ疏」「遼土万苦千辛ノ疏」など——を含む《左忠毅公集》⁽²⁷⁾⑦⑫を刊行したのもこれら党社の人々である。

但しこれらの士大夫は辺防の経験には乏しく、情報の不足も手伝って状況把握の点で時勢に遅れはじめていた。艾南英が《禹貢図説》⁽²⁸⁾②に示した「五服図」では、首都から一〇〇〇里以上離れた夷狄の地では羈縻政策をとり、一五〇〇里以上離れた荒野では流刑人と蛮人を置くことが何の訂正も加えられずに述べられており、彼の描いた明輿地圖は長城外に長白山を記すのみである。また劉宗周は辺防で戦死した明臣を表彰することに反対し、勝つのが当然なのに蛮人に敗死して栄位を享けるとは何事か、と高姿勢を崩さなかった。黄道周は後述する如く、歴史、思想の分野で

明朝文化の保存に寄与したが、彼が「佟哈赤」と呼んでいた満州族の軍勢や組織を正確に捉えようと努力することは遂になかったのである。彼は漢代以来の異民族侵寇の歴史を調べるのに余念がなかった。また《広名將伝》²⁹ ⑦⑩⑫を執筆し歴代の名將の治績を明軍の「用」に役立てようとしたが、それは国内が李自成（鴻基、自晨、一六〇五—一六四五）・張獻忠（敬軒、一六〇五—一六四七）たちの勢力のために内乱状態に陥り、北辺では山海関以北の最後の拠点（前屯衛中後所）を失った一六四三年のことであった。以上の如く、これらの明朝の「忠臣」は、清朝の兵が彼らの眼前に出現する最後の瞬間まで満州族の実力の伸長を適確に把握し得なかった禁書著者たちであった。

これとは対照的に、命脈の尽きた明朝に自分の「生」を賭けてしまう決意がなく、「致用」の道を後に清朝に求めた士人たちがいた。清朝下で「武臣」となった彼らの活動については別述したので繰り返さないが、そのうち禁書著者となった人々は少数の例外（武官吳三桂、一六一二—一七八、《開疆疏草》を刻刊）を除けばみな文官である。錢謙益（前出）、龔鼎孳（孝升、芝麓、端毅、一六一六—一七三）、吳偉業（駿公、梅村、一六〇九—一七一）、周亮工（元亮、樸園、一六一二—一七二）、王鐸（覺斯、文安、一六五二）、孫承沢（耳伯、北海、退谷、一五九二—一六七六）を中心とする南部出身の士大夫で、明末の官界で活躍する傍ら、歴史の編纂、詩文の創作と保存、図書や目録の整備など文人としての仕事に打ち込み、そこに「用」の世界を見出した。また、朱子学の伝統にもこだわらずさまざまな宗教や思想に興味を寄せ論争や支援に時間を惜しまなかった。彼らの作品はこうした幅広い実用主義の結晶であるとともに、明末—内乱—異民族支配という激動期に関する克明な証ともなった。《武臣論》で別述。本節註（22）を参照されたい。」

以上の二つのグループは、満州族への反応がはっきりしていた禁書著者たちの例であるが、態度を決しかねていた漢人士大夫が多数を占めていたことも忘れてはならないだろう。ただし戦敗の重圧はすべての明朝士人たちにひしひ

しと感じられた。北辺の戦況を伝える邸報は朝廷に届かず、領内の各城市は叛乱勢力のため孤立し、「近事は論じるに堪えぬ」状態になっていた。状況を正確に把握する手段も、明朝を護り抜く具体策も失った禁書著者たちに残された「用」は、自分の心境を詩文に託すことだけであった。崇禎時代に入って急に増加した「辺塞」の詩がそれを示している。

天啓初朝には火器による北夷撃退を説いた陳繼儒は『晚香堂小品』⁽³⁰⁾③⑨の中で、

秋風何処起悲笳

秋風はいずこに悲しい胡笳（胡人の蘆笛）の音をたてる。

塞草荒荒一片沙

辺境のくさはらは薄暗く、見渡すかぎり砂地。

白酋將軍紫駟馬

白面の將軍は栗毛の駿馬、「横吹曲紫駟馬の如く帰郷を懐い、」

千鍾虜酒面如花

千鍾の虜酒に顔面は花の色。

と「出塞行」を詠じた。また袁州推官でのに明朝遺王（魯王）に仕える王思任（季重、遂東）は、『避園擬存』⁽³¹⁾③⑦⑨

⑫収録の「出塞」で、

寒日射辺山 一片黒と紫

冬の陽光が辺土の山をさす、「山々は」見渡すかぎり黒と紫。

胡天杳然遙 嗚咽流塞水

胡天は杳としてはるかに、辺河はごぼごぼと流れる。

忽見家鄉月 行人共回指

ふと見ると家郷で眺めた月、行軍の人々はともども指をめぐらす、

前途尚未知 此際堪生死

前途はまだ予測できぬ、この際は生きるか死ぬか堪えぬのだ。

と明軍兵士の不安を書いた後に、

殺虜須殺狡 斬將先斬欺

虜を殺すなら狡い奴を殺せ、敵將を斬るなら欺く者を先ず斬れ。

一客不内入 三軍日鼓吹
えびすは一人たりとも領内に入れるな、軍隊は日々「志氣を」鼓吹せよ。

有来即剪滅 既去勿窮追
敵虜が来ればすぐ殲滅し、去ってしまったえば追いつめるな。

長城嘯明月 此可寄安危
長城で明月に嘯く、これ（長城）こそ「わが明朝の」生命線なのだ。

と明軍の立ち直りを祈っている。

自己の内面へ沈潜していくこうした傾向は一六四四年の明朝滅亡に続く復明運動の挫折を経ていっそう強まっていた。南都滅亡の後郷里の嘉定が清朝に征圧された際に自殺した黄淳耀（蘊生、陶菴、水鏡居士、一六〇五—一六四五）は明朝への失望を次のように表明している。

野人歎息朝無人
庶民が歎くのは当朝に人材が無いこと。

朝中朋党加魚鱗
朝廷には朋党が魚のうろこのようにみだれあつまり、

十官召対九官默
十官が天子に召されれば九官はだんまり、

匍伏苟且容一身
匍伏して其の場のがれを言い、わが身を安んじる。

廟堂何人理陰陽
当局ではだれが吉凶禍福を治めているのだろうか。

頻年日食四海荒
日食は連年のこと、天下はききん。

吾欲上書問朝士
私は書を奉って朝官のことを問いたい、

却恐人訶妄男子
朝官たちは男といつわってやはりとがめられはせぬかと。

（朝野大勢如是、雖欲不亡、其可得乎³²）

生涯抗清の姿勢を貫き、三藩の乱にも加わったといわれる広東の文人屈大均（翁山、介山、一六三〇—一六九六）は一六

八二年次のように中華の沈滞を嘆いた。

.....

故国江山徒夢寐

故国の山河はむなしく眠りの中、

中華人物又銷沈

中華は人も物も衰えしずみ、

毒蛇四海掃無所

英傑は四海に掃る所とて無い。

寒食年年愴客心

年年寒食の節、旅人「たる私」の心はいたむ。

(壬戌清明作)⁽³³⁾

このように禁書著者たちが崇禎年間以降、「歴史」や「文学」などの分野で軍事(A)や政治(B)を語るようになったこと、それ自体に私たちは士大夫たちの「用」の変質を見ることが出来る。周辺民族を羈縻し威服せしめてきた「中華」が逆に「建州女直」や「逆賊」の前に無力を露呈し遂にその支配下に置かれるに至った、その事実を認めざるを得ない禁書著者たちは武力以外に能力を発揮する場を求め、各々の「用」を尽そうとしたのである。数千年を概観すれば王朝の滅亡などはほんの一時の出来事に過ぎぬ悠久たる中国の歴史に没頭すること(前節に掲げた禁書内容の分類ではCに属す)、そこに出現した多数の名将・義士の姿、あるいは現在志を遂げ得ず斃れつゝある同志の姿、それらを明るみにひき戻し次代の漢人に伝えること(D)、過去の文人や同僚の作品を戦火から救い漢文化の粹を保存すること、或いは個人の思索の跡を記述すること(E・F)、こうした思考活動による個人の能力発揮を、富国強兵への努力に遜色なき「用」と見做して疑わなかった禁書著者たちの柔軟性こそが明末清初中国の意識の特徴であったといえよう。この柔軟性をたんに文筆活動にとどめず社会活動において発揮した一つの例が、曾っての敵であった満

州族のもとで軍事・行政の経験と手腕を生かそうとした武臣の出であったといえる。逆に、時流に乗り得ず才能を虚しくした人々が多方面から惜しまれたことも当時「用」が重視されていた証拠とみてよいであろう。しながら、史学（C・D）、思想（E・F）その他の資料が私たちに告げるものは禁書著者たちの「用」への志向のみであろうか。さらにはこの「致用」精神はいかなる構造を有していたのか。この点に留意しながら次節以下で続いて禁書著者の思考の特色を探ることにしたい。

1 ……是皆為遼鎮患者。「要在修理城池辺堡墩台壕牆、以嚴保障耳」。林德謀輯《古今議論參》五五卷、崇禎七年序刊本、卷四八、一三 a

2 高拱撰《辺略》五卷、覆知聖道齋旧鈔本、玉簡齋叢書所収

3 「西敵稽顙称臣、東敵投戈授首……」同右、序一 a

4 「国家時当全盛、自可以鎮馭四夷、況復輸誠、叩首称臣請貢、……彼既屈復於我、……故直受而封錫之、則可以示輿圖之無外、可以見桀獫之咸賓、可以全天朝之尊、可以伸中華之氣、即使九彝八蛮聞之、亦可以堅其畏威帰化之心」。同右、卷二、伏西紀事、一六 a

5 西敵新附、「東敵尚然内窺。若遂得志、則有以陰啓西敵驕心、雖得貢市、不足為罕也。必須大加一挫、則不惟北敵心、寒而西敵亦皆知畏貢市、乃可永焉」。同右、卷三、安辺紀事、五 b—6 a

6 展之、則「朝家之典章、人物之權衡、經籍子史、礼樂兵刑、以至財賦阨塞之区、耳目親聞之概、悉具備」。干慎行撰、郭応龍輯、《穀山筆塵》一八卷、万曆四一年序福唐郭氏黄石山堂刊本、筆塵題辭（馮琦）、二 a—b

7 ……燭忠、如觀火、「至干軍国機宜、華夷阨塞、莫不備舉」。干慎行撰、郭応龍輯、《説史漫録》一四卷、万曆四二年序福唐郭氏校刊本、説史漫録題辭（葉向高）、四 a

- 8 「本朝輿図、母論勝国、即較之漢唐、亦有不及。東面朝鮮、即漢之玄菟・樂浪、唐之安東都護也。西面哈密、即漢之安西、唐之四鎮也。北面河套、即漢之五原、唐之豐勝等州也。南面交趾、即漢之九真・日南、唐之五管之外境也。朝鮮建國公矣。旧遼陽控連遼左、以通京師。而為二衛所扼河套、為西虜所扼哈密、為吐魯番所侵交趾。旋得旋失、較之漢唐、剪其四幅矣」。
- 《穀山筆塵》、前出、卷一八、夷考一 a—b 玄菟は高句麗、安東上都護府は大凌河沿岸の都督府所在地。五原、豐州、勝州は内蒙の黄河沿岸にあり、ウイグルの前進基地。九真、日南は漢代には交州と呼ばれた北ヴェトナムの都市。
- 9 一五八六年進士の袁黄は、北辺には人が群れ財金の輸送も盛んなのに將吏の搾取下で「士卒は疲弊し、結んだ胄は破れ担いだ戈は朽ちている」と述べる。城門の兵士が持つ「斧は幅二寸足らず、棍は柳で用に堪えぬ」と一六一九年進士の劉宇亮も述べた。

- 10 茅元儀撰《武備志》二四〇卷、天啓元年序刊本
- 11 茅瑞徵撰《東夷考略》不分卷、覆燕京大学図書館蔵上虞羅氏伝鈔本、清初史料四種所収
- 12 陳繼儒撰《建州攷》一卷、明清史料彙編第八集所収
- 13 陳子壯撰《昭代經濟言》一四卷、嶺南遺書第三集所収
- 14 方孔炤撰《全辺略記》一二卷、民国一九年国立北平図書館排印本
- 15 「国家自受命以来、承平者二百五十載、士大夫無所寄。其精神雜出於理学・声歌・工文・博物之場、而布衣在下、不得顯於時、亦就士大夫之所喜、而為之。……人不能以已所不知者知而喜、以同已所知者為賢。故朝野之間莫或知兵。又古者文武之途合、故仕者亦送為之。送為自不得不兼工。其学、自本朝始判、焉若水火、而洪宣以来、文師之權又日重、是以不知者制所知、限其学、而責其効也。故東胡一日起、士大夫相顧惶駭。文士投袂而言者、武弁能介而馳者、即以為可將。上以此求下、以此応計無所之、則覲顔而曰神、而明之存乎其人。嗟乎、一人之身聰明無兩具也」。《武備志》、前出、武備志自序、一 a—二 b
- 16 「乞勅速取、以暢天威、以靖仇敵事。臣思火器一節、固有不費帑金、不侵官守、深於戰守有裨。……今藩遼暫失、畿輔驚

疑。光啓奉旨召回、摩厲以須、而臣之不才、又適承乏軍需之事。反復思惟、此器不用、更有何器。此時不言、更待何時」。徐光啓撰《增訂徐文定公集》六卷首二卷、民國二二年上海徐家滙天主堂藏書樓排印本、卷三、附李之藻奏為制勝務須西銃勅乞速取疏
 17 「備物致用、立成器、以為天下利」。《周易》九卷附略例一卷、景上海涵芬樓藏宋刊本、四部叢刊經部所收、卷七、一一a
 18 「嘗考典籍、唐宋無火器。独我朝有之。若能精我之所長、攻虜之所短、此火政也」。《建州攷》、前出、五a—b
 19 夫奴亦人也。彼侍馬、馬蹶則為跛蹶侍弓、矢竭則為擊拳、而「中國之火器、前古所未有。此天之所以壯聖威也。乃自火器興、而矛鉞劍戟之用等干蒿枝」。《古今議論彙》、前出、卷四八、遼議（姚希孟）、二六a—b
 20 「今誠為恢復計、則奴果不可以不擣」。兵機不可以不速。同右、破三說擣奴巢議（陳仁錫）、一八b—一九a
 21 「打造戰船千号、挑選精卒、統以智勇胆略之將、潛伏于天津山海、而陽出陸兵數万於三岔河之間、高其壘、赤其纛、以示渡河之勢、奴必悉銳甲以拒我師、而我以舟師潛抵鴨綠江、直擣其巢穴、率東江之兵、收遼之四衛。又約朝鮮之旅、攻奴之腹心。三方竝進、水陸夾攻。此時奴欲帰、而陸兵尾其後。奴欲戰、而我已潰其巢。奴欲風、而毛兵衝其右、鮮師截其左、勢必四分五裂」。同右、一九a—b

22 明官が入関前の清に降る事件は一六一八年以後頻発したが、一六三〇年の大凌河降城は一挙に三〇余名の將官が降満したので有名。これらの「大凌河降將」は清の国力充実に貢獻した。《武臣論》、東洋文化研究所紀要第六十八冊所収、参照

23 王在晋撰《三朝遼事實録》一七卷、總略一卷、民國二〇年江蘇省立國立圖書館用原刊本景印

24 「慨惟遼土沉淪、英雄喪氣。或長算偶昧于幾先、或履錯竟羅于愆、或舌臧而死法、或捐軀而死敵、浩劫所臨、什不存一、而秉忠殉國、文臣武士正副、以及偏裨動至千百、当事者掩罪、蓋愆廟廊之上。又諱言失律、名姓未彰、草木同朽、白沙黃壤、怨鬼長号」、赤莽青燐、遊魂莫返、夷陵之土成灰、蓑弘之血化碧、「而簡史不知其人」。浩氣消磨、鬱結為厲。「且巳午以後、邸報不伝、多識多聞、統婦髻頭……」同右、自叙、一二b—一四a

25 吳必箕《樓山堂集》二七卷、粵雅堂叢書二編第一三集所収

- 26 李綱撰、左光先輯《宋李忠定公奏議選》一五卷、刊本
- 27 左光斗撰《左忠毅公集》二卷、道光一八年刊本
- 28 艾南英撰《禹貢圖註》一卷、学海類編經翼所収
- 29 黃道周撰《広名將伝》二〇卷、海山仙館叢書所収
- 30 陳繼儒撰《眉公先生晚香堂小品》二四卷、中国文学珍本叢書第一輯所収、卷六、一三六—一三七p
- 31 王思任撰《避園擬存》一卷、中国文学珍本叢書第一輯王季重十種所収、一六一—一七p
- 32 沈德潛撰《明詩別裁集》一二卷、乾隆四年序刊本、卷一一、三b—四a
- 33 屈大均撰《道援堂詩集》一三卷、刊本、卷八、六b

第三節 史学重視

明末の陳繼儒（前出）は史学に留意する人が少いと歎いて、「……当今では子弟は史書を読まず、史官は史書を編纂しない。帳簿は新も旧もみな高閣に置く。どうして歎かずにいられようか。未だ出仕しない内は帳簿を勘定する人で、既に出仕すれば帳簿を管理する人である。史官とは帳簿を写す人なのだ。はつきり写せば、勘定がはつきりし管理がはつきりする。そうすれば天下国家の事は掌を指すように燎然とする。それ故、史とは謂わば天地の一大帳簿である⁽¹⁾。」と記している。しかし史学に深い関心を寄せていた江南の文人錢謙益（前出）は、「本朝の学者士大夫で史に従事する者は多い⁽²⁾」と述べており、その言を裏付ける如く明清交替朝を中心に多数の歴史・伝記（C・D）が残されていることは、第一節で見た通りである。万曆中に開設された明史局が成果を挙げないうちに明朝は破局を迎え、征服

王朝清に明史編纂は委ねられることとなるが、士人たちは個人の努力でそれを補ってあまりある国史、野史、伝記を刊行したのであった。

これらの史書は、一七世紀当時においてすでに過去に属していた事項をテーマにしたもの（例えば吳應箕著《樓山堂集》⑤⑫の史論における「漢高帝論」「韓信論」など）と、当時においては現在の状況を追求し分析しようとしたもの（例えば顧炎武著《明季三朝野史》⑬、黃宗義著《行朝錄》⑧⑫など）の双方を含んでいるが後者が圧倒的多数を占める。さらに前者に属すると見做し得る史書でも《李溫陵外紀》⑭や《古史通略》⑩などは、明朝士大夫が過去の中華における異民族の脅威を辿りつゝ古代の士大夫像の中に自己の分身を予感して編纂したものであり、あくまで現在の意識がはたらいていたというべきであろう。

このように同時代の生き証言としての性格が濃い史書は禁書著者たちのいかなる思考を反映しているのであろうか。明朝にとり前朝であった元代の歴史について、明末清初の禁書著者たちはそれが明の「国初」、元朝に関する禁忌の厳しい時代に成ったものだけにきわめて不出来で「一代之史」に価しないという評を一樣に与えている。しかし、漢民族王朝であった宋代の歴史についてもかれらは決して満足していなかった。《永樂大典》《嘉靖実録》の編纂者である瞿景淳（師道、昆湖、文懿、一五〇七—一五六九）は「古今史学得失」という一文の中で、《史記》《漢書》を「良史」として推薦し次いで宋史について、「その本紀は天子の大経、大法を述べたものであるが、くどくどしく繁雑で、ささいな事までも書き入れ、甚しい場合には臣下の事に及んでいる。列伝は臣下の嘉⁺いはかりごとを記録するものであるが、こせこせと綴り合わせ、爵位や寵愛を大言し、遂にまるで家乗のように雑多なものにしてしまった。」⁽³⁾と批判した。錢謙益は、「夷狄の臣が胡虜を尊び代々の夏を卑しむのは怪しむに足りない」⁽⁴⁾ゆえ、元朝の人によって書か

れた宋史の不出来はやむを得ぬとしながらも、「宋」史を作成した者は要領というものが無いから記載が煩雑にならざるを得ない。凡そ身辺の事は竄し、党籍の人については一人一伝を立て、烟波ただよう海の如く浩繁に書いているのに、才人・志士でその間に列なるはずの人たちはというとおおむね皆、古書書冊の中に埋没させているのは逆さ事ではなかるうか。執筆した「元朝の」臣は身は亡国に在ったので「夏が」島夷索虜を忌み嫌ったことや、夏は内、夷は外で「あるから」外夷を排し「夏を」恢復する大義が有ることを皆敢えて訟言しなかった。靖康の流離（一二七年、徽宗が金の捕虜となり連行された）、淳熙の屈辱（南宋孝宗の南渡、一一八五年）などは皆、没にして書かなかった。こんなことでどうして臣虜たる身のはずかしめを著わし、事件の仇討ちを厳しくできるだらうか。執筆者は崖山（がいざん）の故事、変遷の遺録、宋の遺民故老（の記事）、「文天祥を悼んだ」西台慟哭記や冬青樹を、一切抑えて書かなかった。定った哀悼にはあらわに言わぬ辞が多いとはいふものので過去のことではないか。これは宋史の欠点である。⁽⁵⁾

凡例に規準がなく、紀事と伝に区別なく、叙述が重複・錯誤・疎略しているといういわば形式上の欠点と共に錢謙益が鋭く指摘しているのは史実が作者の立場によって歪められたという内容的な欠点である。この点は異民族が中華を支配した時にだけ生じた現象でなかった。即ち明代に入ってから、漢人士大夫が故意に蒙古の歴史を中国史から脱落させ異民族を無視しようとした事実をも錢謙益は公平に指摘する。「我が太祖高皇帝は、元が一六二年間国を有していた、国を滅ぼすことはできたが、その歴史は滅ぼすことができぬ、と言われた。偉大なるかな。この王言は万世、易わることはないのだ」。⁽⁶⁾

歴史は朝廷の滅亡を超えて生命を保ち続けるという思考は、史実を重視して偽史の出現を防ぐべきである、という史書編纂の心得としてだけでなく、明の衰亡朝に遭遇した漢人士大夫たちに移り行く現在を記録する必要を知らせた

点で重要な意味を有していた。王朝が滅びるからこそこの事実を書き伝えねばならない。その任務は自分たちの双肩にあることを彼らは自覚したのである。私たちは第二節において、禁書著者たちの対決姿勢が武力で敵をねじ伏せようとするものから、次第に漢文化の高揚をめざすものへと移っていく過程を見たが、そこには「歴史」が政変を超えて存在するという士大夫たちの確信が潜んでいたのである。明朝の滅亡後、遺王たちによる明の復興が絶望的なことを知りつゝも、東の間の「政權」を最期まで記録した士人たちがなぜ輩出したか、また清朝になって成長した漢人士大夫が前朝に殉じた人々の死にさまを一人一人について克明になぜ書き記したか、の解答の一つはここに求められよう。書き遺す現在、いつかは歴史となって現在の文化の水準を将来に示す——この自覚は他方では士大夫たちの強い自己主張となつて彼らの著作に表われた。史書に残らないからといって歴史そのものを否定することは出来ぬ、しかし自分が見聞したこと、自分が考えたことを書かなければいつたい誰が歴史を証明するのであろうか。同じ事件について立場を異にする者の一方だけが記事を書き、他方が沈黙していたら歴史はどのように偏つて伝えられることだらうか。こうした自覚と危機感に支えられて士大夫たちが、己れの意志を歴史によつて残そうとした例は少くない。

東林党を弾圧した魏忠賢（一六二八）の死後、宦官への反撃は凄まじく黃道周、劉宗周、周亮工、吳應箕、吳偉業、倪元璐たちが関官誤国の非を喝らした。非難の矢面に立った劉若愚は《酌中志》を執筆し遼東失陥が決して自分たち宦官の失政に依るものではないことを歴史的に証明しようとした。また明朝滅亡の際、或いは李自成・張献忠らの反乱勢力に屈し、或いは南下してきた清朝に投降した明官たちを、曾つての同僚で今や明朝に殉じる覚悟をした遺臣たちは決して許そうとしなかった。文官の武臣たちが遺臣に対してその死後も追懷を寄せていたことは別述したが、⁽⁸⁾反対に遺臣による武臣の記事は「……逆賊（張献忠）に従つた諸臣は光時亨、龔鼎孳、陳名夏、項煜、周鍾。皇太子の定

王、永王は俱に害に遇った。」「(金声が)南京に着くと、洪承疇(武臣)が欣然と迎えた。……金声は叱咤して言った、『洪承疇は進士に合格し、万曆帝、崇禎帝の深い御恩を受け重職を歴任し、松山・杏山(の戦い)で死んだ(はずだ)。……かれこそ我が明朝の忠臣だ。敢えて其の姓名を騙るとは何事か。』」など裏切り者を告発する痛言にみちている。⁽⁹⁾

攻撃、弁明ばかりが禁書著者たちの遺志ではない。彼らは同志と見做す者、尊敬する先駆者、愛惜する者、に対しては時間、空間を超えてその行動と意向を記した。また見聞したこと、評価し伝承すべきことをも記録した。そこではすでに、史書(C・D)の分野をはみ出して、他のジャンルにおいて歴史が語られるのが見受けられる。例えば屈大均(前出)は『明季南都殉難記』⁽¹⁰⁾の中に、清の支配に抵抗し明朝に殉じた多数の士大夫の最期を記録し、二朝に仕えぬ死節を称えているが、それと共に「趙武靈王」「武靈王墓」「燕昭王」などの詩を書き、匈奴の侵入を防いだ古代の英雄を称えている。南明野史の著者でもある顧炎武は『明詩別裁集』に収録された詩「述古」⁽¹¹⁾によって三代の先王の後、五国が亡んだことを詠じているし、同じ詩集に収録された「題李竜眠諸夷職貢図」⁽¹²⁾の作者韓治(君望、顧炎武と同時代の人で清朝に仕えなかった)は宋代元豊年間(一〇七八―八四)の「凋残」⁽¹³⁾ぶりを描き、「殊方異域、皆來庭」した唐の盛時期貞観年間(六二六―六四九)の様子と対比させる。

このように禁書著者たちが史書という形式を踏み越えてさまざまなジャンルにおいて歴史を語ろうとした時、彼らの史的考察は各人の専門分野において発揮され成果を挙げた。もはや王朝の変遷や諸臣の活躍を記録するだけが歴史ではない。孫承沢(耳伯、退谷、北海、一五九二―一六七六)は中華の學術史『学典』⁽¹³⁾を執筆し、夏・周代から唐・宋代を経て明末(一六四三年)までに王朝でいかなる學術上の議論が行われたかを示した。錢謙益は明代の詩人の代表作を『列朝詩集』⁽¹⁴⁾に編纂後、詩人たちの伝記『列朝詩集小伝』⁽¹⁵⁾④を著わし、黄宗羲は『明儒学案』⁽¹⁶⁾で明代の儒學思想を

時代順、系統別にもれなく紹介した。吳応箕は天啓・崇禎兩時代にわたる闖禍の歴史を《兩朝剝復錄》⁽¹⁷⁾に示し、嚴穀の《東林書院志》③⑦⑨⑫に比肩する《東林本末》⁽¹²⁾によって文人結社の存在理由を説いた。また、《皇明經世文編》⁽¹²⁾《皇明經世實用編》③⑫《皇明經濟文錄》⁽¹²⁾《皇明經濟文輯》⁽¹²⁾等は經世に関する明代の名言を集めている⁽¹⁸⁾、すでに第二節で見た如く、方孔炤の《全明略記》③⑦⑨⑫、于慎行の《讀史漫錄》②⑫などは滿州族に視点を置いた歴史であった。これらの作品はみな歴史の記述ではあるが、内容はあくまでA・B（軍事・政治）、E・F（文学・思想）の各分野を対象としている。

歴史の永存を信じ、そこに強烈な自己主張を織り込んだ禁書著者たち——彼らの史学重視は遂に史学（C・D）以外の分野をも歴史化するに至った。だが諸部門におけるこの史的考察とはそもそも歴史そのものの保存をめざして發揮されていたのだろうか。

朱彝尊（錫鬯、竹垞、一六二九—一七〇九）は清初に《明詩綜》⁽¹⁹⁾⑥を編纂して次のように記している。「洪武年間から崇禎年間迄の詩を總べて聚めて精察鑑定した。上は皇帝・皇后から、近くは宮中・文武官、遠くは王畿の外、さては婦人・寺院・僧尼・道派・諸流幽幻の鬼神、下は諸々の歌謠、諺に及ぶまで、選に入れた者は三四〇〇余人、或る場合は詩に因って其人を保存し、或る場合は人に因って其詩を保存した。間隙には詩話を綴り、本事（事跡の出所）を述べて作者の趣旨を失わぬよう期した。天命の既に訖^{おつ}たり死んだりした封疆の臣・亡国の士大夫・禁固に処せられた党人と、在野の遺民とは、概してその録を著わした。分けて一〇〇巻にしたのは、一代の書と成してひそかに国史の義に就き、閱覽者がそのよしあしを明らかにできるようにしたいと望むからである」⁽²⁰⁾（一七〇五年）。

亡国の詩文を伝えることによって中華は亡国となることを免れる。この努力は清の支配が確立してからも続けられ、

「本朝に居ながら前代の明を妄りに思う者は乱民である」⁽²¹⁾という警告が出た乾隆初期まで明詩の編纂が繰り返された。その他の分野においても故人の作品の散佚を防いで次代に継ぐ努力は子孫や友人、門人による遺稿・遺集の刊行ブームとなつてあらわれ検閲制度の確立していない一七世紀の読書界を豊かにした。また大がかりな叢書・類書の編纂も活発で、《昭代叢書》⁽²²⁾⑨⑫、《潛確居類書》⁽²³⁾④⑦はその一例である。

禁書著者たちは先人たちの書を愛読すると共にそれを記録にとどめ、散佚を防ごうとした。顧炎武は《亭林文集》⁽²⁴⁾で述べる、「万曆以来、「史を編修する上で」是非は塗りつぶされ雜然と混亂している。現在のものをさておき、嘗つて見た書のうち刊本では、王在晋の《辛亥京察記事》・《遼事実録》⁽²⁵⁾③⑦、王嶽の《清流摘鏡》⁽²⁶⁾③⑦⑨⑫、蔡士順《原文闕》の《儒菴野抄》⁽²⁷⁾③・《尚論錄》、蔣德璟の《愨書》、鈔本では劉若愚の《酌中志》⁽²⁸⁾⑤⑦⑫、史惇の《慟余雜記》⁽²⁹⁾③⑨の類は欠かすことができない。……」ここに挙げられた人はみな後の禁書著者である。福建出身の周亮工は《閩小紀》で述べる、「徐興公の言によると、わが郷土の先輩で豊富な蔵書を所有したのは、馬森恭敏公、陳暹方伯公である。馬公の末子は読書家でよく蔵書を守ったが、陳公の後継者はそれを止めたので蔵書は減り、雲霞の如く散佚してしまった。さらに、林懋和方伯公、王応鍾太史公もまた書を集めることが好きで図書館に寄贈したが、まもなく書は尽くなくなつてしまった。……予の友人鄧原岳參知、謝肇淛方伯、曹学佺觀察は書が大好きである。鄧君は装訂・整頓し「彼の蔵書に」手をふれると新本のようにだ。謝君は蒐集に専心し批点を施さない。曹君は満卷に朱を入れ、書籍を枕にしてぐっすり眠る。三君は各自癖があり、多数の秘本を得ている。しかし三君もまた予の垣根（内の秘本）⁽³⁰⁾を窺うことはできない」。禁書著者たちの蔵書癖はしかし、単なる個人の道楽に止まらず文化遺産としての書の保存へと発展した。天一閣、文淵閣、千頃齋、汲古閣、絳雲楼などの蔵書を禁書著者たちは共有の宝として意

識しており、例えば呉偉業は金・元代以来の蔵書一〇〇万巻がいったん宣和に保存されながら、甲申（一六四四）後、動乱のため消失したことを歎き、

金元図籍到如今

金・元の図書は今にいたるも、

半自宣和出禁林

半ばは宣和〔殿内府〕から禁苑の林を出〔て燕に運ばれ〕たもの。

封記中山玉印在

中山王（徐達）が封記した玉印は今もあるのに

一般烽火竟銷沈

いちめんの戦火で〔図書は〕みな消滅してしまった。

と詠んでいる。⁽²⁷⁾

図書を愛惜した禁書者たちは、さらに多方面の文化に関心を寄せた、前掲の周亮工は《江表紀略》③④・《西山勝境》③の作者徐世溥（巨源）の言葉として記す、「癸酉（一五七三年）以後、天下の文治は盛行へ向った。趙南星（夢白、儕鶴、忠毅、一五五〇—一六二七）・顧憲成（叔時、涇陽先生、一五五〇—一六二二）・鄒元標（南阜、爾瞻、一五五一—一六二四）・海瑞（汝賢、剛峯、忠介、一五一四—一五八七）の道德節操、袁黃（坤儀、了凡、一五八六年進士）の窮理、焦竑（弱候、澹園、一五四二—一六二〇）の博物、董其昌（元宰、一五五五—一六三六）の書画、徐光啓（前出）・リッチ（Matteo Ricci、利瑪竇、一五五二—一六一〇）の曆法、湯顯祖（若士、一五五〇—一六一七）の詞曲、李時珍（東璧、一五一八—一五九三）の本草、趙宦光（凡夫、一五五九—一六二五）の字学、ひいては時代の陶工、顧氏の冶金、方氏・程氏の墨、陸氏の玉磨き、何氏の刻印、これらは皆、古代の作者と比べても遜色ない⁽²⁸⁾」。周亮工や徐世溥が、明滅亡の惨状を体験した文人であったにもかかわらず明末を文化全盛期とみなしたのは、彼らが文化を、国力の盛衰とはまた別の次元でとらえ得たからである。

禁書著者たちの史的思考の本質は、C・D項（歴史）の重視のみに在ったのではなく、A—Gまでのあらゆる文化遺産——書籍として残るものもその他の有形無形の文化財も含めて——の保存と継承にあった。彼らの史学重視とは漢民族文化の誇りを維持することであり、歴史それ自体はこの伝統文化を貫く一つの枢軸として機能した、と言うことができよう。

- 1 「……今子弟不読史。史官不編史。旧帳簿・新帳簿、皆置之高閣。豈不可歎。夫未出仕是算帳簿的人、既出仕是管帳簿的人。史官是写帳簿的人。写得明白、算得明白、管得明白。而天下国家之事、燎若指掌矣。故曰史者、天地間一大帳簿也。」王世貞撰、陳仁錫訂《綱鑑大全》三九卷首一卷、明刊本橫秋閣藏板、序（陳繼儒）三b—四a
- 2 「嗚呼、本朝學士大夫、從事于史者衆矣。」以海塩之志焉而弗史、以太倉之力焉而弗史、以南充之位与局焉而弗克史、国家重熙累治度越漢唐、而史事闕如此、亦士大夫之辱也。錢謙益撰《牧齋初學集》一一〇卷、景上海涵芬樓藏崇禎一六年刊本、四部叢刊集部所收、卷二八、七b、少司空晉江何公國史名山藏序
- 3 竊嘗考之、宋史、「其本紀、所以述天子之大經大法也、而乃委曲泛濫、兼收細行、甚或下及於臣事。列伝、所以録臣子之嘉謀嘉猷也、而乃綴緝叢委、誇乘爵寵、遂使猥同於家詔。……」《古今議論參》、前出、卷二五、一二b
- 4 元人修端之議、謂當以五代之君通作南史。遼兼五季、前宋為北史、建隆至靖康為宋史、金源与南宋為南北史。「夷狄之臣、尊胡虜而卑諸夏、無足怪矣」。同右、一九a—b
- 5 「作史者、既無要領、則紀載不得不煩。凡竄身辺事、掛籍党人者、人立一伝、浩如煙海、而才人志士、參列其間者、類皆冒沒於枯竹汗簡之中、不已償乎。秉筆之臣、身在勝國、有島夷索虜之嫌、内憂外夷、安攘恢復之大義、皆未敢以訟言。至於靖康之流離、淳熙之屈辱、皆没而不書、則何以著臣虜之差、嚴事讐之討乎。它如崖山之故事、桑海之遺録、与宋之遺民故老、哭西台而樹冬青者、一切抑没而不書。雖曰定哀多微辭、不已過乎。此宋史之失也。」同右、二〇b—二一a

6 「我 太祖高皇帝曰、元有国一百六十二年。国可滅、史不可滅。大哉、王言、万世不能易也。」同右、一九b
7 劉若愚撰《酌中志》二四卷、海山仙館叢書所収

8 《武臣論》前出、第二節註(22) 参照

9 「從逆諸臣、光時亨・龔鼎孳・陳名夏・項煜・周鐘。皇太子定王・永王、俱遇害。顧炎武撰《聖安紀事》二卷、上、七b
「至南京、洪承疇欣然迎見。……声叱之日、……」邵廷采撰《東南紀事》一二卷、中国歴史研究資料叢書、卷四、二〇八p.

10 屈大均撰、陳鳳藻校《明季南都殉難記》一卷、光緒三十三年上海均益圖書公司排印本、国学叢書第四種所収

11 《明詩別裁集》、前出、卷一一、一五b—一六b

12 同右、二〇b—二一a

13 孫承沢撰《学典》三〇卷、道光二年葉志詵鈔本 原闕第一八第一九

14 錢謙益輯《列朝詩集》乾集二卷甲集前編一一卷甲集二卷乙集八卷丙集一六卷丁集一六卷閏集六卷、刊本

15 錢謙益撰、陸燦輯《列朝詩集小伝》不分卷、中国文学参考資料小叢書第二輯所収

16 黄宗羲撰《明儒学案》六二卷、乾隆四年序刊本、慈谿二老閣藏板

17 吳昞撰、夏燮校証《兩朝剝復録》六卷、景樓山堂遺書本、明清史料彙編第二集所収

18 いずれも嘉靖崇禎年間に出版された。撰者は本文列挙順に、陳子龍、馮応京、万表、陳其倬。

19 朱彝尊輯、汪森等評《明詩綜》一〇〇卷、康熙四四年自序刊本

20 「合洪武迄崇禎詩甄綜之。上自帝后、近而宮闈宗潢、遠而蕃服、笏及婦寺僧尼道流、幽素之鬼神、下微諸謠諺、入選者三千四百余家。或因詩而存其人、或因人而存其詩、間綴以詩話、述其本事、期不失作者之旨。明命既訖死封疆之臣・亡国之大夫・党錮之士、遺民之在野者、概著於録焉。析為百卷、庶幾成一代之書、竊取国史之義、俾覽者可以明夫得失之故矣。」同右、朱彝尊序

- 21 「其居本朝、而妄思前者乱民也」。沈德潛輯《欽定国朝詩別裁集》三三卷、清刊本、御製沈德潛選国朝詩別裁集序、一 b
- 22 張潮輯《昭代叢書》康熙中刊本
- 23 陳仁錫撰《潛確居類書》一二〇卷、崇禎三年至五年長洲陳氏刊本
- 24 顧炎武撰《亭林文集》六卷、亭林遺書所収
- 25 「自万曆以還、是非之塗樊然叢乱。姑以目所嘗見之書、其刻本、則如辛亥京察記事・遼事実録王在晉、清流摘鏡王巖、倬菴野鈔同時尚論録二書蔡口口、懋書蔣德瑤、鈔本則如酌中志劉若愚、懋余雜記史惇之類、皆不可闕、……」同右、卷三、一三 b
- 26 「徐興公云、吾鄉前輩藏書富者、馬恭敏公森・陳方伯公暹。馬公季子能說能守、陳公後昆寢、微則散如雲烟。又林方伯公懋和・王太史公応鍾、亦喜聚書、捐館、未幾書尽亡矣。……予友鄧參知原岳・謝方伯肇淵・曹觀察學佺、皆有書嗜。鄧則裝潢齊整、触手如新。謝則銳意蒐羅、不施批点。曹則丹鉛滿卷、枕藉沈酣。三君各自有癖、然多得秘本、則三君又不能窺予藩籬也」。周亮工撰《閩小記》一卷、說鈴前集所収、四四 a
- 27 吳偉業撰《梅村家藏稿》五八卷詩補遺一卷文補遺一卷、景武進董氏刊本、四部叢刊集部所収、卷一九、五 a
- 28 「新建徐世溥曰、癸酉以後、天下文治嚮盛。若趙高邑・顧無錫・鄒吉水・海瓊州之道德丰節、袁嘉興之窮理、焦秣陵之博物、董華亭之書画、徐上海・利西士之曆法、湯臨川之詞曲、李奉祀之本草、趙隱君之字学、下而時氏之陶、顧氏之治、方氏程氏之墨、陸氏攻玉、何氏刻印、皆可与古作者同敝天壤」。周亮工撰《因樹屋書影》一〇卷、覆雍正懷德堂刻賴古堂原本、中国文学参考資料叢書所収、卷一、三 p.

第四節 存在と認識

明清交替期の禁書著者たちは文学・思想（E・F）の分野において激しい論争を行っている。自己の信奉する学説

のみを「正教」「聖教」と見做し、他をすべて「異端邪説」と非難してその根絶を呼びかける《異端論争》がそれである。A—D項の分野で見られる漢民族の共通意識はここでは後退し、むしろ士大夫の個性をむき出しにした対立、相剋が顯著である。たとえば一六〇三年、当時礼部尚書の馮琦（前出、第二節参照）は李贄（卓吾、一五二七—一六〇二）を「惑世誣民之罪」で告発し、士大夫たる者が「本業の精髓（経史の精神）を棄てて異教の残りかすを宗とする。これは中華の声韻をさいづちまげの蛮（人の）語に雑（まじ）えるようなものだ」⁽¹⁾、それゆえ、このように異端の教えに傾倒する輩からは科挙応試の資格を奪うべし、と上疏している。これに反して李贄を篤信する焦竑（前出）は伯淳の言を引いて、「……年少者の務めである水撒き掃地や尊長者への応対は、おのずと仏家〔の教え〕と合致することであり、〔儒家は〕この理を知らぬわけではない、それなのに必ず異をとなえて区別する。これほどまでに皆が異端攻撃で名を挙げようとし、〔真の〕名を失っている。天下が一家たることを知らず、糴（かいよね）を不正に妨害して自ら偏狭な習慣に固執しているのだ。蓋し世儒は名に牽かれてその実を得ないことが往々にある。即ち自私自利のために釈氏を譏る。どうして自省しないのか。」⁽²⁾と儒家を非難した。他方、儒学者で聖教復活を志し、一七世紀の三大思想家に数えられる王夫之（船山、一六一九—一六九二）は「今の学者（姚江の学徒）は迅速に一度で悟りを獲ようと期待する、幸いに〔悟りを〕獲ると終には逸楽をほしきまゝにする」⁽³⁾と述べ、「禍いを流したひどさは、焦竑・李贄が極めつきだ」⁽⁴⁾とこの二人を名指しで非難している。

他方、富国強兵のために「西洋神器」「西術」「西法」の「致用」に熱意を示した徐光啓（前出）は一六一六年、「蓋し彼の〔ヨーロッパ諸〕国の教徒は皆身を修めて上主に事えることを務めとしている。聞けば中国の聖賢の教えもまた皆身を修めて天に事える。〔双方の〕理は互いに符合する。……仏教が東来して一八〇〇年になるが世道人心が未

だに改良されないのは其の言が正しいようにて、正しくないからだ⁽⁵⁾と述べ、彼の腹心で登萊の守將孫元化(前出)は、「泰西の教に非ずんば三代の隆盛に「還すのは」不可能である⁽⁶⁾」⁽⁶⁾と言いつてゐる。だが明末の高僧雲棲珠宏(一五三五一六一五)は《竹窓隨筆》で、「彼(天主)は才智が優れているとはいへ未だ仏教の経を読んでいない。だから言うことが間違うのも無理はない。現在「天説を」信奉している士友は、皆立派な君子で時にきわだつていて、衆人はそれを仰ぎみてから態度を決める「ほど」なのだ。私は「この人たちの」耳に逆らうこともかまわずひたすら忠告せずにはいられないのである。おそらくすぐれた人は草かりや木こりの言のような私の忠告を賢察するだろう⁽⁷⁾」と述べ士大夫が「天説」に傾倒するのをいしめた。珠宏に影響を受けた徐昌治(通昌、観周、無依道人、武原居士)は仏家、儒家の協力を得て天主教追放のキャンペーンを行い《明朝破邪集》を刊行(一六三八年)した。

思想・宗教の対立のみならず、奄党対文人結社、遺臣対武臣などの政治抗争も禁書著者たちの思想的対立に影響を与えた。世代や精神形成を共にしながら、士大夫たちは宦官支配や異民族支配への賛否によつて対立しあい、そこから、彼等自身の存立に関わるテーマ——君臣の道とは何か、正邪を区別する規準は何か、施政の決定は「議論」の相違によるのか「流品」の相違によるのか、等——を検討する人々が輩出した。黄道用、劉宗周、黄宗羲らの思想家たちも、呉偉業、錢謙益らの文人もその例外ではなく、彼等は権力闘争の経験の上に独自の思想を築いたのである。

明朝の惡しき風習、輕浮な思想を広めた文人として一世紀半—二世紀後に一括して異端とされるこれらの禁書著者たちが世中にこのような異端論争を続けた理由は何か、多岐にわたる論争の主題は何か、彼等の「異端」「邪説」とは思想史的にいかなる位置に在るのか、これらの問題については第三章(異端思想)において検討することとし、本節ではまず、こうした異端論争を可能にした禁書著者たちの認識構造をあきらかにしておきたい。

私たちが明末清初の禁書に見出す認識の特徴は効率主義・実用主義に呼応する実験・実測の要請であり、それは認識の第一段階としてしばしば使用されていた「耳目」（感覚器官のこと、「口」や「手足」を含むことがある）というタームに表われている。自分の耳で聞き、目で確めたことしか信用できない——それが戦果であろうと、人材であろうと、「虜・寇」の残虐行為であろうと「異俗・物産」であろうと。これが「実理」・「実事」を求める禁書著者たちの認識方法の原点であった。具体例としては暦法作成のための観測や軍事や治水に必要な測量・作図などがまず挙げられる。艾南英は《禹貢図註》を書いた後に「当今の人は書を読むが図を省りみない。これを譬えれば〔或る〕人の言を聞くとはするが〔その〕人の形姿を見ようとせず、それでいてその人を知っていると謂うようなものだ」と述べ、一字も使わずとも「すべて脈絡の行余曲折、方面の縦横」が一目瞭然となる地図の効果を強調している。また音韻・言語などは耳から入ってくる。徐光啓は「職方朝貢」の諸国外にある遠国の知識をイエズス会士から聞いて「喜ぶべし、愕くべし、人をして未だ聞かざる所を聞かしむ」と感想を述べ、王徴（前出、第二節参照）・張問達（徳允、一六二五？）らは中国語音のアルファベット化に興味を示し《西儒耳目資》の刊行に協力した。耳・目の効果を助けるものとして「器」が好まれた。「佐目之器」「佐耳之器」がそれで「遠鏡」は天体観測に使われると共に敵情を探る「器」であった。《守圉全書》③⑦⑨⑫の著者韓霖（雨公、寓菴、Thomas, 一六〇一—）は《慎守要録》「制器篇」に望遠鏡を記載し、王徴は《遠西奇器図説録最》を著わした。

これらをまとめると、「耳目」は王夫之（前出、一六一九—一六九二）の説明する如く、「形象や声音を得る官」といえよう。だがこの「耳目」の用法は当時必ずしも厳密であったとは言えない。《臨安館詩集》③⑦⑨の著者黄景昉（太禪、東屋、一五九六—一六六二）は「八万里之遙」から来たイエズス会士の博識を称え、中華の士人が閉鎖的であること

を反省し「吾輩は安居・飽食し、目は井戸の外を窺こうともせず平然としている」⁽⁹⁾と述べているがこの場合の「目」は知識全体を対象としている。また楊師孔(願之、冷然、一六〇一年進士)は《兩浙名賢錄》②⑬の序で「前人の精神は後人の耳目である」と言う。「孔子は此(精神)によって春秋の耳目を開いた。子輿氏は仁義によって戦国の耳目を、司馬遷は記伝によって二二六〇余年の耳目を、班掾父子は述作によって一代の耳目をそれぞれ開いた。今迄久しく「わが」友は幾千の古典に思いをひそめ、親しく其の作者にまみえ「作者に」礼讓を行うが如くに書室に礼讓していた。書を開けば掌を指すようであり、「わが友は」後人の盲聾を啓くことができる。……蓋し珍しいアイデアや突飛な行動も世間に遠ければ埋もれやすい、練達の士や高明な人も跡を隠せば光を没する。名山や大河は、その「人たちの」精神を自ずと完全なものにさせることができるが、その「人たちの」耳目に世の經驗を積ませることはできない。後に生れる立派な行為は必ず高山の練達の士の指南をかりている。惟うに針路に循ってこそ精神は上世に通じることができるのに耳目は壁面に隔てられ易いのだ。……故に上世の精神を振り立たせて今の人の耳目に受け継ぐと望むならこの書を欠くことはできない。今の人の耳目を醒まして上世の精神を浸透させようと望むならやはりこの書を欠くことはできない。……ああ、耳目が開かれていれば精神は必ず振り立つのである。目下、「明朝は」東は建酋(建州夷の頭目)に、南は安蘭(河内の氏族)に、苦しんでいる。青田の如きをどこに求められよう。「名臣」忠肅公(王翺)、文成公(王守仁)のような人々が袂を奮って起ち、協力してまたとない業績を建て、ここに境界を安んじるように」⁽¹⁰⁾。

この場合の「耳目」とは単なる感覚器官でなく判断力をそなえた広い意味での認識能力である。他方、袁宏道(中郎、石公、一五六八—一六一〇)のように認識能力における耳目の役割をまったく否定した人もいた。「耳で聴くことができるというのなら死者にも耳が有るのに何故聞えないのか。目で視ることができるというのなら死者にも目が有る

のに何故見えないのか。手で持ち足で進むことができるというのなら死者にも手足が有るのに何故起たないのか。心で思惟することができるといふのなら死者にも七竅（耳目鼻口の七つの穴）が有るのに何故全く知覚や認識がないのか。……⁽¹¹⁾」密語を聴いてこそ耳が有ると云える、帖を差しだせば内容が分つてこそ目が有り、実証すれば書き、物に遇えば題してこそ思慮が有ると云える。もし「神」が根本になれば耳目思慮は何の役にも立たぬ、と彼は述べた。さらに人間の認識能力（情量）は天地を究明するに足らぬと考え、「拘儒小士が常見・常聞する所でもって未だ曾って見聞しない天地のことを反駁するのは、定法で自分を縛り、その上定法で天下の人・後世の人を縛るものだ⁽¹²⁾」と儒者の不遜を非難している。

だが王夫之をはじめ、劉宗周、顧炎武、黃宗羲など儒家の禁書著者たちは、「耳目之官」による「聞見」だけではまだ認識のための材にもなりえないと考えていた。「聞見」は次に「心之官」（思惟）による検討をうけねばならない。先人の獲得した知識を参照して博く学び、詳細に検討する——《中庸》でいう「博学」と「審問」のことで併せて「学問」という——ことにより「聞見」ははじめて「物則」（データ）となる。この段階を王夫之は「格物」と呼んでいるが、「心之官」の作用はさらに具体的な内容を有しており、データが出た理由を考え、根拠のないデータをしりぞける——「慎思」。次にデータから結論を推理し、明白な結論のみを取る——「明弁」。以上の二段階の操作を行うのである。この「思弁」はデータ処理の「技巧」（テクニック）であって「格物」に対して「致知」の段階といわれるが、王夫之はこれらすべてを「心之官」の作用とみなす。それ故彼によれば認識は「格物」だけで充分であり、「致知」はそれに含まれるべきものである。

王夫之の認識方法は、感覚器官と思惟能力をはっきりと組みあわせた当時の一典型例であるが他にさまざまな説明

が出た。顧炎武はむしろ「致知」によって最初に根本精神——君主ならば仁、臣ならば敬、父ならば慈、子ならば孝——をつかみ、それから「格物」により個々の具体的なケースへと取りくむ方法を取ったし、黃道周は「格物」で直観的に対象の全貌をとらえようとした。

「格物致知」の内容について多様な解釈を出した禁書著者たちに共通していたのは、認識した「知」を「知」のままに留めておいてはならない、必ず「行」によってその「知」を活用せねばならぬ、という実用主義であった。「用」はこれまで見た如く明末清初の士大夫の当然の要請であったが、一六世紀初に出た王陽明の「知行合一説」がこの要請に根拠を与えていた点を見逃すことはできないであろう。この「知行」の内容は明末清初の思想全体に関わってくるし、清朝が後に陽明学を「異端」と見做した理由、さらには士大夫間の「異端論争」の基盤を成しているので第三章（第七・第八節）で検討することとしたい。

認識の対象は儒教の伝統的用語「格物」の影響で一般に「物」と呼ばれた。その内容は天地万物を指す。黃道周は《榕壇問業》において、「宇宙内外の形有り声音ある所から、声・臭〔など〕を超えた所にまですべてこの『物』が貫いてい⁽¹³⁾る」と述べ、南・北極のように人間が行って定めることのできぬ地点であっても羅針盤を作り計測をしてこれを把握した際には「物」であると例示した。同じく福建出身の儒家許孚遠（敬菴、一五三五—一六〇二）は「人に血の気が有れば心（靈覺）がそれを知り声や顔色にさまざまな障害が出る。〔病氣が〕目前に未だ判然としていなくとも病根は常に存在している⁽¹⁴⁾」と、この「病根」を「物」としている。また鹿善繼（伯順、乾岳、忠節、一六三六）は「大学の明德、中庸の性、論語の仁、これらは皆、物である⁽¹⁵⁾」と、徳目などの概念が「物」と呼ばれることを明記し、劉宗周は諸概念を「道」で一括して「物」に含めた。天下国家の事、社会活動も「物」であった。「兵農錢賦、辺防水利」

など禁書の分類におけるA・Bの諸事項は勿論のこと、C・Dに属する「人事」やE・Fの思考——「心の造る所」——はみな「物」であった。

これらの「物」の本質について、明末清初の禁書著者たちは、儒家の場合には「氣」であると述べている。前出の劉宗周が「天地の間を盈たすのは、一氣のみである。氣が有れば数が有り、数が有れば象かたちが有る。象が有れば名が有り、名が有れば物が有る。物が有れば性が有り、性が有れば道が有る。故に道は後に起るのである。しかるに道を求める者はややもすれば求めるに際して未だ氣が有るようになってないのに道が氣を生じると考える。」と、「氣」を物の根底に置くのをはじめ、鹿善繼も「宇宙を俯仰すれば、みな一氣の中を呼吸している」と簡潔な表現で「氣」の普遍的存在を説く。顧炎武は「精氣が物と為る」と言い王夫之は比喩的な表現で、

物〔笛〕——氣〔笛の声色〕

とその密切な関係を示している。⁽¹⁸⁾

このように「物」の基底には「氣」というエレメントが無限の広がりをもっている、とすれば禁書著者たちが認識の主体として説明してきた「耳目之官」「心之官」もまた「万物」の中の一物として、「氣」を離れ得ないであろう。実際、当時の儒家黄宗羲・王夫之たちが宋学に対して表明した不満のひとつは「氣」「氣質」を一種の夾雑物として認識能力から切り離れた点であった。王夫之は「氣を舍いて志（志は心の本体）は無く、志もまた得る所も成す所も無い」と、認識する主体が「氣」と一致することを主張し、黄宗羲もまた「氣質を離れて亦知覚を為す所なし」と述べている。

以上、禁書著者たちの認識構造を追っていくと存在としての「氣」の一元性に至ることが理解できる。だが、彼等にとって認識とは、認識主体と認識対象とがエレメントを同じくするという「一体感」を意味していたのであるうか。私たちは「万物同体之原」たる「氣」が禁書著者たちの思考にどのように関わり、どのような位置を占めていたのかを、もう少し具体的に彼らの作品の中に探ってみよう。

明の諸生で清初の史獄に連坐して殺された潘檉章（聖木、力田）は、天啓中に刑死した遼東経略・熊廷弼を悲しんで詠じる、

……

昨聞遼東戰 流離不可見 「きのう聞きました、遼東の戦いを。さまよっていて出会うことができませんでした。」

身還士卒死 相逢畏君面 「我が身は還り、部下は死にました。相い逢って御尊顔をおそれます。」

勦君無浪戰 今日果何如 「君が徒浪の戦をされぬよう、のぞんでいました。今日の結果はいかがですか。」

兵敗氣不復 涕泣亦已愚 「いくさは敗れ、氣は回復しません。涙を流しても、もう愚かなことです。」

生民百遺一 但可護入関 「民は一〇〇人に一人残っているだけです。ただ入関を護ってやれるだけです。」

可憐兩大師 不戰而自還……きのどくな兩將軍（熊王弼・王化貞）。戦わないで自身は生還。

（駭馬閭陽道行）⁽¹⁹⁾

また陳際泰は満州族の侵攻に対抗する呼びかけで次のように述べている、「そもそも氣は兵の貴ぶものだ。以前は奴と事を構える段になると、一矢も発せぬうちに自ら風をくらって逃げてしまっていた。今は幸いにして健在であり、

兵の氣は次第に回復することが出来る。まさに今は心を同じくしてこれ（兵の氣）を救い、堅忍不拔をもってこれを持續し、ゆったりとこれを落着かせる時である。昔の人が小勝に益々懼れ小敗に益々勇むと云ったのは其の氣を養うゆえんであり、小勝に喜ばず小敗に懼れずと云ったのは其の心を養うゆえんである。」このような戦いの「氣」は第二節で見た如く王在晋（兵部尚書）が「遼土沉淪、英雄喪氣……」で始まる文章で憂えた明軍の士氣を想起させる。左光斗の「急ぎ遼東ノ飢寒ヲ救ウベキノ疏」にも「□□之胆而壯。我師之氣、目下之不敢跳梁、將刻期撲滅、先着全在於此。」⁽²¹⁾という一節があり、明末の人々が満州族の興隆と明王朝の衰亡を物理的な力の差としてよりも、「氣」の趨勢、運行としてとらえていたことを示す。この場合、「氣」は人の精神状態を表わすものの、個人の意志を超えた存在である。人々は天地からこの「氣」を借り受けているに過ぎず、それを喪失した時、命運もまた失われてしまうのである。

それでは、いかなる「氣」が個人の思考を反映できるのであろうか。陶望齡（周望、石簀、一五六二）は徐渭（文長、天池、青藤、《徐文長文集》の著者）について言う、「文長は才能を天性に負うている、「木で言えば」節目〔にあたる精剛な所〕を慎重に飾ることはできないが、彼の足跡の一部始終はおもりに処士（臣下の礼を誰にも取らぬ偉人）の氣が有る。その詩と文もやはり同じことである。瑕瑾を免れないが、全体として成功しているのは文長たる者だけなのだ。」⁽²²⁾この場合の「氣」は人の能力・才能を指している。謝肇淛（在杭、一五九二年進士）は《五雜俎》③⑦⑨⑫で述べる、「人の才氣は時機が来たらきつと用いるべきである。時機を過ぎても用いなければ「才氣は」衰えてしまう。蘇長公の如きは、若い時は非常に聡明で文章や議論は縦横・活発であったが意見が世に容れられずしばしば挫折し、隠れ住んだり下獄したりで流浪し困窮して、とうとう一身を立てることができなくなった。故に年を追って議論は慈悲深く

憐れむべきものになり竹蝨や鶏卵のようになってしまった。その上、仏の子と自称し数個の蛤や蟹を食べてもすぐに懺悔をする。昔のさかんな英氣はすり切れてどこへ行ってしまったのか。⁽²³⁾

もともと個人の「氣」は必ずしも望ましい才能であるとは限らない。清朝のもとで拳人となった趙吉士（天羽、恒夫、寄園主人）は《寄園寄所寄》⑨⑩において次のような皮肉な文章を残している。「崇禎年間の大臣を一人ずつ占うと、当時の大官と言官が互いに事を構えてやまず、ともにゆずることがなかったのは〔彼らが〕二四氣の目を造って内外を惑乱したからだ。その二四氣とは、

殺氣——呉姓、棍氣——孫晋、戾氣——金光宸、陰氣——章正宸、妖氣——吳昌時、淫氣——倪元璐、
瘴氣——王錫衮、時氣——黄景昉、癘氣——馬喜植、賊氣——楊枝起、悔氣——王士鎔、霸氣——倪仁楨、
疝氣——周仲璉、糞氣——房之祺、痰氣——沈維炳、毒氣——姚思孝、逆氣——賀王盛、臭氣——房可壯、
望氣——吳維業、雜氣——馮元颺、濁氣——袁愷、油氣——徐沂、穢氣——瞿式耜、月氣——錢元愨。

各々〔このような〕あだなが有り、中には賢人と不肖者がまざっている。淫氣、逆氣、油氣、穢氣とした者は皆後に国難に死んだ。⁽²⁴⁾（尚朝識小録）個人の氣は内部に留まらず、周囲に独特の雰囲氣を漂わせる。名士の強烈な雰囲氣の場合は国難の原因ともなる。もともと雜氣、月氣などがいかなる乱を呼ぶ氣なのか今のところ筆者には不明である。個人の能力を表わす「才氣」も、人さまさまの「氣質」も、先天性がものを言う。修養や教化によって、一時の迷いや病いを治すことはできても天賦の性を根こそぎ変えることはできない。人は享けた「氣」を出来るだけ正しい方向（道）に副って充分に用いるよう努めるだけである。このように人における「氣」は戦いの命運であれ個人の精神であれ、いずれも「天地之氣」に合致するものとしてとらえられていたのであった。

ところで禁書著者たちの作品で、「氣」は人間以外の場合どのように表現されるのであろうか。《擬山園集》③④の著者で文官武臣の王鐸（覺斯、文安、一一六五）は龔鼎孳（前出）の詩について次のように述べている。⁽²⁵⁾「先生は中和の氣に逆わず、静かに居処に安んじておられる。だから其の詩は日に日にすぐれて珍しく、ますます深く鍊りきたえられ温厚の氣が凝り固まって表面にあらわれない。その上、時のならわしや決まった作法と戦っているのは疑いもない。」ここでは龔鼎孳という人物の「温厚」の「氣」が詩に凝結する。そうして同じく文官武臣の李元鼎（梅公、一六二三年進士）はこう記している。⁽²⁶⁾「先生の詩を読むと世につれて変るといふことがない。黄河・長江の運河は轉移するかもしれないが。〔龔先生の詩との〕遭遇は屈原・宋玉の〔ような師弟の〕ものではないし、交流は蘇武・李陵の〔ような旧友の〕ものではないが温厚で平和な氣を覚える。……」「氣」は作者を通して作品に宿り、宿った「氣」は読者の認識対象となるのである。

また、既に第二節において見た如く実用の見地から重視された「器」を禁書著者たちは「神」器、「奇」器などの形容詞を冠し大砲一基毎に「神威大將軍」「威遠大將軍」等の命名を行った。「器」は「形而下之氣」として一般には前述の「物」に包括されるが、火器に対する命名にも「天地之氣」「人之氣」「物之氣」の混淆が感じられる。さらに「器」の意味も決して「器物」に限定されていたのではなく、「兵は器なり」（呉広策）というように弾力的で「氣」の一元性が禁書著者の思考に浸透していたことをうかがわせる。

以上の如き「氣」の諸例から禁書著者たちが人間の活動に一貫性を与えるものとして「天地之氣」を存在の根底においていたことはほぼ明らかであろう。但しこの「氣」は現世における活動に一貫性を与えるだけではなかった。「人之氣」と「天地之氣」の結合は、禁書著者たちの思考に王朝が滅亡しようと人が死のうと不変であるという不変の概

念を与え続けたのである。明滅亡後、一時李自成に従い、次に清に仕官した龔鼎孳（前出）は自らも謫遷、入獄等の経験者であるが、一六五九年、諫言のために遼左に流刑中病死した漢臣に寄せて詠う、

関外音書那頻見

手披諫草人猶羨

可憐白髮倚陔雲

卻遣青春逐飛電

至尊尚念披鱗人

魂歸塞壘悲麟峴

敢云逢比非俊物

堯舜自有臯夔臣

(27)

山海関外の信書はあのようにしきりに「皇帝の」めどおり叶い、

手づから「帝が」諫言の上書をひもとかれたことを人は今なお羨やむ。

哀れなことよ、白髪の元老たちはかさなる雲（帝の威光）をたよりに、

新進の青年を遠くにしりぞけ、いなびかり「のように切れる人」を追い払った。

皇帝はなおもこのすぐれた人に胸衿を開くことをおもっておられたのに。

魂は辺塞の堡壘に帰りついたが深い崖（元老たちの妨害）を悲しむ。

敢えて云おう、天子が親しくされている人達は傑出した人物ではないのだ。

堯や舜「のような聖天子」は自ら求めて臯陶・夔「らの名臣」をもたれたのだ。

このように人の死を哭す詩や文、墓誌銘などは禁書著者たちの作品の重要な部分を占めている。境遇の如何を問わず非業の死が次々に士大夫を訪れた明末清初においてはその機会が多かったとはいえ、人の稟けた「氣」が「身後」も「魂」となって飛游するという思考がかれらの内面を支え続けたことを忘れてはなるまい。終生、広東で清朝に抗した屈大均は康熙年間に入ってもなお、

元老忠貞竭

中朝歷數屯

大老・忠節の士は敗れ、中朝の命運は行きなやんでいる。

十年方社稷

一夜尽君臣

十年国家を保っても、一夜で君臣はほろび尽きる。

野月寒難曙 江花慘不春

野の月は寒く夜明けは来ぬ、河辺の花は萎れ春花とならぬ。

精魂⁽²⁸⁾底殺賊 莫但作星辰

精魂はまさに賊を殺すべきもの、ただぼんやり星霜を過してはならぬ。

(正氣祠作)

と詠み、満州族打倒の執念を「魂」の力に託した。「魂」が存在する限り万事は畢つたのではない。人の死は「終身」、つまり肉体の命のみが終つたことを意味する。但し黄宗羲の考え方では「魂」がこの世に残るケースは「氣を厚く稟けた人」、「氣を充分に培つて効用あらしめた」、或いは「志を貫くことに専心した人」に限られる。つまり「聖賢の精神は長く天地に留まる」が「凡愚の魂は散じる」のである。

私たちは禁書著者たちの「氣」の把握によって、彼らがなぜ明滅亡期に各自の「才」を発揮すべく努力してやまなかつたかを理解できよう。「才(氣)」は「天地之氣」に通じるから、たしかに「尽才」は「天心」にかなうことではある。しかしそれだけではない。稟けた「氣」の「用」を尽すことは自身の実利のためでもあったのだ。「才(氣)」の善用は再び我が命となつて帰つて来るのである。とりわけ、秩序社会が破壊され、あるいは異民族の、あるいは無頼の徒の、氣まぐれによつて冷たい骸となるという予感に常に追われている漢人読書人にとつて循環する「氣」の永存こそは生きる活力の原動力になつたと考えられる。

認識の問題はそれゆゑ禁書著者たちにとつて稟けた「氣」を尽すための一段階にすぎなかつた、と考えられよう。「物」の認識はたしかに彼らにとつて伝統的なテーマであり、とくに明末清初「用」の要請に促されて方法の吟味が厳しくなつた。しかし禁書著者たちが「辺防」を論じた策や疏の中で、或いは生活を詠じた詩文の中で、まささに記したのは自己の存在のありかを求める言葉であり、生命に密着した「氣」の表現である。彼らは「格物」に代表さ

れる認識方法を最終目的として体系化することよりも、存在の充実を優先させたのである。

私たちは本章第一節で禁書書目の分布に明清交替の事実が強く影響を与えていることを見たが内容別に特色を検討した第二・三・四節においても、滿人支配成立の影響は禁書著者たちの思考活動の方向を決定付ける程強力であることを知らされた。厳しい条件の中で躍動した彼らの思考の内容は後に一括して「異端」の烙印を得るのであるが、先ずこうした思考状況の原点を作り出した滿人支配そのものを彼らはいかに受けとめようとしたのか、次に第二章で検討することしよう。

- 1 ……寧有經史不能誦、而於經史之外博極羣書之理。「案本業之精髓、宗異教之殘膏、譬如以中華之音、雜魑魅之語」。馮応京輯、戴任校《皇明經世實用編》二八卷、民国五十六年台北成文出版社用万曆三十二年序刊本景印、卷二八、正学疏
- 2 「……酒掃応対、与仏家黙然処合、則非不知此理、而必為分異、如是、皆慕攻異端之名、而失者之也。不知天下一家、而顧遏羣曲防、自處於偏狹固執之習。蓋世儒牽於名、而不造其実、往往然矣。乃以自私自利譏釈氏、何其不自反也」。黄宗羲撰《明儒学案》六二卷、康熙三十二年刊乾隆一八年補刊本、紫筠斎藏板、卷三五、焦竑撰《答友人問釈氏》、一九a—b
- 3 「今之学者馳江之徒速期一悟之獲、幸而獲其所獲、遂恣以佚樂。」王夫之撰《思問錄内篇》一卷《外篇》一卷、船山遺書所収、思問錄内篇、二四a
- 4 「流禍之深、則極於焦竑・李贄」。王夫之撰《說四書大全說》一〇卷、船山遺書所収、孟子、卷一〇、尽心下篇、九六a
- 5 「蓋彼国教人、皆務修身以事上主。聞中国聖賢之教、亦皆修身事天、理相符号。……奈何仏教東来千八百年、而世道人心未能改易、則其言似是、而非也。」《增訂徐文定公集》前出、卷五、一一p
- 6 「一還吾三代之隆懿者、非泰西之教、不可也。」高一志撰《則聖十篇》不分卷、孫元化序

7 「彼雖聰慧，未說仙經何怪乎。立言之舛也。現前信奉士友，皆正人君子，表表一時，衆所仰瞻以為向背者。予安得避逆耳之嫌，而不一聲其忠告乎。惟高明，下拯羈縻而電察焉。」珠宏撰《竹窓隨筆》一卷二筆一卷三筆一卷首一卷，万曆四三年序刊本，三筆，六九^a（天說）

8 「今人徒讀書而廢圖，譬如欲聞人之言，不欲見人之形而謂知其人也。」可乎。是圖攷正特詳與經傳一字不迕，凡脈絡之紆曲，方面之縱橫，讀者開卷瞭然矣。《禹貢圖註》前出，序，一^b

9 嗟乎，彼大儒風格，特見於重訳棠嶠之久八万里之遙，而「吾輩安坐飲食，目不窺井外乃視焉。」議其區區得失是則可媿也。艾儒略撰《三山論學記》一卷，康熙三三年京都天主堂刊，黃序，七^a

10 ……前人之精神即後人之耳目是也。「孔子以是作開春秋之耳目，子與氏以仁義開戰國之耳目，司馬子長以記伝開二千二百六十余年之耳目，班掾父子以述作開一代之耳目。迄今尚友者低徊千古，揖讓一堂，如親見其人履其事。開卷指掌，即可以啓後人之聾聵者也。……蓋瑰意奇行世遠而易漣，達士高人隱跡而埋輝。名山大川能使其精神自完，不能使其耳目閔世。後生景行必藉高山達士指南，惟循鍼路，然精神能通於上世，而耳目易隔於面牆。……故振上世之精神以接今人耳目，必不可無此書。欲醒今人之耳目以透上世精神，亦必不可無此書。……嗟嗟，耳目既開，則精神必振。方今東苦建酋，南苦安蘭，安得如青田、忠肅文成輩奮袂而起，相與建非常之業，以靖茲封疆哉。」徐象梅撰《兩浙名賢錄》五四卷外錄八卷，光緒二六年浙江書局槐天啓四年序刊本重刊，楊序，一^a—二^b

11 ……人之視聽操履含知秉耀，非以手足耳目心也。「謂耳能聽，死者亦有耳，何不聞。謂目能視，死者亦有目，何不見。謂手持足行，死者亦有手足，何不起。謂心能思，死者七竅具在，何以都無知識。」袁宏道撰《梨雲館類定袁中郎先生全集》二四卷，南雍周文煒原鐫孫憲健重刊本，卷一六、一五^b—一六^a

12 「拘儒小士乃欲以所常見常聞，闢天地之未曾見未曾聞者，以定法縛己，又以定法縛天下後世之人。」同右，二^b—三^a

13 「自宇宙內外，有形有聲，至聲臭斷處，都是此物貫徹。」黃道周撰《榕壇問業》一八卷，明儒学案（前出）所收，卷五六

諸儒学案、下、四、五 a

14 「人有血氣心知、便有声色種種交害。雖未至目前而病根常在。」（許孚遠）同右、卷四一、甘泉学案、五、七 b

15 「大学之明德、中庸之性、論語之仁皆是物也。」（鹿善繼）同右、卷五四、諸儒学案、下、二、一七 a

16 「盈天地間、一氣而已矣。有氣斯有數。有數斯有象。有象斯有名。有名斯有物。有物斯有性。有性斯有道。故道其後起也、

而求道者輒求之、未始有氣之先、以為道生氣。」劉宗周撰《劉子全書》三八卷首一卷、道光一五年序刊本、卷二、三 a

17 「俯仰宇宙、都呼吸一氣之中。」《明儒学案》、前出、卷五四、諸儒学案、下、二、一七 a

18 物と氣の關係について王夫之は

〔声色〕
〔笛身〕
〔笛身〕
〔旋律〕

氣—物—質—理

の比喩で説明している。音楽の生命がメロディーよりも声色そのものである如く、氣が理よりも重視されていることが分る。

（禁書に書かれた思想）比較思想研究、第三号、六九—七八 p. に別述した）

19 潘耒撰《今樂府》二卷、古学彙刊第一集詩文類所収、卷下、一〇 b

20 「夫氣兵之貴者也。向者与奴從事未嘗斃一鏃、而望塵聞風逆自奔潰。今幸而健矣、兵之氣可以漸復。當時者濟之以同心、

持之以堅忍、而澹之以广大。昔人云小勝益懼小敗益、属所以養其氣。小勝不喜小敗不懼、所以養其心。」《古今議論纂》前出、

卷四八、九 a

21 左光斗撰《左忠毅公集》二卷、道光一八年刊本、卷二、一 a

22 「文長負才性、不能謹飾節目、然蹟其初終、蓋有处士之氣。其詩与文亦然、雖未免瑕類咸以成、其為文長者而已。」徐渭

撰、袁宏道評点《徐文長文集》三〇卷補遺一卷、万曆四二年序刊本、徐文長伝（陶望齡）、五 a

23 「人之才氣，須及時用之，過時而不用則衰矣。如蘇長公，少時多少聰明，文章議論縱橫飛動，意不可一世，屢經摧折，貶

竄下獄流離困苦，至不能自保其身。故其暮年議論慈悲可憐，如竹鷄卵，亦稱仁子，食數蛤蟹即便懺悔。向來勃勃英氣，消磨安在。」謝肇淛撰《五雜俎》一六卷，覆上海圖書館藏明黃氏刊本，中國文學參考資料叢書所收，卷一五，p. 四三八

24 「崇禎年，枚卜閣臣，一時大僚及台諫，相搆不休，其不得与会推者，因造為二十四氣之目，以搖惑中外。其曰二十四氣者，殺氣 吳姓、棍氣 孫晉、戾氣 金光宸、陰氣 章正宸、妖氣 吳昌時、淫氣 倪元璐、瘴氣 王錫衮、時氣 黃景昉、癘氣 馬喜植、賊氣 楊枝起、悔氣 王士鎔、霸氣 倪仁楨、疝氣 周仲璉、糞氣 房之祺、痰氣 沈維炳、毒氣 姚思孝、逆氣 賀王盛、臭氣 房可壯、望氣 吳維業、雜氣 馮元颺、濁氣 袁愷、油氣 徐沂、穢氣 瞿式耜、月氣 錢元愷。各有諱號，中間賢不肖參雜。其指為淫氣·逆氣·油氣·穢氣者，其後皆死國難。」趙吉士撰《寄園寄所寄》一二卷，休寧趙氏刊本，卷六，焚塵寄，勝國遺聞

25 「……先生無忤于中氣，靜而安於所，是故其詩日殊瑰而逾沈鍊，溫厚凝凜不形，又不疑戰于時習令節之痺也。」龔鼎孳撰

《定山詩堂集》四三卷詩余四卷增芳草詩一卷，光緒四年聽彝書屋重刊光緒十一年附刻本，序一五b—一六a

26 「……說先生之詩而不予世變，江河運會轉移之際，遇非屈宋，交非蘇李，但覺有溫厚和平之氣……」同右，一七b

27 同右，卷四，二三b

28 屈大均撰《道援堂詩集》前出，卷六，三〇a

第二章 反満意識

第五節 満人観の変遷

一五世紀初の永樂帝即位と同時に建州・毛隣・女直等衛が開原の東北に設置されて以来清朝創立者の先祖たちは「建州女直」と呼ばれ、「野人女直」「海西女直」と共に金の「余孽」であると言われた。「建州女直」は建州から南へ渾河・蘇子河を越えて鴨緑江の下流まで明の辺牆を覆う形で居住しており明朝から見れば最も近くにゐる女直であつた。一四六七年に「靖虜將軍」の印を授かつて「カフツリ黠虜」(「わるがしいえびす」)を討伐した趙輔(前出、第一章第二節を参照)は《平夷賦》で次のような「建州女直」のイメージを記す。「臣の聞くところでは建州女直は東夷の狡猾な虜で肉を食し皮を見て山林に居住し、弓矢に頼る。そうして丘陵に憑り山林の險阻を恃みとする。其の心はずるくてわるがしこく、其の力は辺境で強く、蛇が突き豕が奔るようにひとすじになつて来、忽ち行つてしまふ⁽¹⁾」。

ここで示された「東夷」「虜」という呼称と、「狡猾」「わるがしい」という評価は、以後禁書著者たちの間に定着し、満人像の基本的な表現として繰り返し使用されることとなつた。すなわち、一五〇三年吏部給事中の鄭文盛(一四五九—一五三六)は、「遼東では先年、三衛が内附し東夷が恭順を効したので陛下に言上して広寧・開原に馬市を立て交易することにしました。当時虜囚は款を納め、時に馬を塩・米に易えました。彼方は食品を得、我方は戦いの攻め道具を得ました。「とこころが」近ごろ賊虜は⁽¹⁾ずるがしこく、使用に堪える馬を売ろうとはしません。市に持ち

込むものはただ、榛・松・貂・鼠、瘦せて弱々しい牛馬のみです。」と上奏したのはじめ、一五三年進士の鄭曉（空甫、淡泉、端簡）が「近日諸虜は旧怨を解いてよしみを通じ、我方へ出たり入ったり忙しく動き回っており且つその前進退却・会合別離には頗る紀律正しいものがある。その上、我方の逃人を擁して巧みに間諜と為し、「これらスパイが」市や店にまぎれこみ、首都圏を窺うようになった。」と警告し、馬森（前出）もまた「いったい、虜夷というのは、わが辺防の様子をうかがい見て向背する。或る場合はひそかに強い寇に付和し騷擾をほしいまゝにし、或る場合は飢えと寒さに責められてわが騎馬・家畜を掠める。急激に逐えば遁けて行き、少し緩めるとまた来る。つまり、素性が狡猾なのだ。」と前二者に共通した呼称と不信感の表現をためらわない。

一七世紀に入っても「……虜は狡い、心を有し、必ず誠意を以てではなく疑心を持って接する」（袁黃）という従前通りの満人観が述べられるが、それと並行してこの北辺の異民族が次第に不気味な存在になってきたことを示す表現も出てくる。文翔鳳（天瑞、太青、太僕寺少卿）は一六一五年《皇極篇》③の中で「虜」と「我」を対比して次のように述べている。「そもそも虜は悍々しいが、我方は臆怯である、虜は死を軽んじるが我方は生を重んじる、虜は専ら利に趣くが我方は懸賞を出し惜しむ。虜は奪い取ったものを得る、己れが擱まえた人間は己れの奴婢にする、だから戦では各人自覚して趣き、敵を見れば利を逐うさまは鳥が群がるようだ。ところが我方が士卒を扱うやり方とはというと、朝まで腹にもたれるほど夕食をたつぷりということはまるでなく、一年おきの兵餉すら全額支払いをしないのに、〔士卒が〕力を尽して殉じるのを欲し、餓えた虎の口を催促〔するようなことを〕しているのだ。……」

明朝の防備が充実して居り自分たちが「虜」に対して嫌悪や不信を表明して澄まして居られる間はよい。だが戦力において彼我の差がなくなった場合には「虜」の習性は「我」（中華）の不安を増す要素となりこそすれ、決して鼻先

で喰うべきものではない。文翔鳳は、「戦」のみに焦点をあてた結果、はじめて「虜」と「我」を同列に置いてチェックする必要を認め、対敵の強味を数え挙げたのである。

満州族の不気味さは一六一八年—一九年の撫順陥落・四路大敗によって明朝士大夫の誰の眼にもはっきりした現実となった。私たちは第二節で、一六二〇年以後禁書著者たちが対応策に動き出し明軍の再建をめざしたことを見たが、満人観についてもいかなる変化が生じたかを注視しよう。

一六二〇年（旧曆四月）、張熊は「遼事ハ威徳並用スベキヲ論ズルノ疏」で満州族との戦いに朝鮮兵・遼兵を起用すべしと進言する。張熊によれば、朝鮮は「中国を助けて小醜を殲滅することを欲している」⁽⁷⁾。それ故、「蛮夷（朝鮮人）を以て蛮夷（満州族）を制する、これより善い計はない」⁽⁸⁾のである。边防に異民族を使えという提言は珍しくなく、すでに一六世紀に王世貞（元美、鳳州、弇州山人、一五二六—一五九〇）が「中国にとって善いやり方は虜を以て虜を攻め、しかる後に虜を全て制することだ」⁽⁹⁾と述べているし、さらに一六〇八年ごろから辺臣熊廷弼（前出）たちが重点守備を主張する一方で遼東居住民を厚遇して边防に役立てようとしたことは第二節に述べた通りである。禁書著者たちが北辺守備にその力を利用しようとした朝鮮人や遼東居民たちをこのようにいづれも虜・夷と呼んでいた点からは、明朝の人々が満州族とその他の異民族を一括して野蛮人と見做していたことが読み取れるが、著者たちがとくに明朝を痛い目に遭わせた満州族だけを「小醜」と呼んで他と区別している点に注目すべきであろう。翌年（一六二二年）郎文晩（雲南澂江府知府）もまた、「今上天啓帝の辛酉に東師は大敗し、天下は岌岌として軍事を憂えている」と述べた後、友人茅元儀の言を紹介する形で「今東夷小醜は虚に乗じて猛然と襲う」⁽¹⁰⁾と同じ呼称を用いている。禁書著者たち

が満州族をことさらに矮小化し醜惡さを印象付ける表現を採るに至ったのはその力を無視できなくなつたからで、中華の威信を傷つけられた憤りと内心の動揺とがこの「小醜」という表現に籠められているように思われる。

同様に奴兒哈赤を「奴酋」と呼び、彼の率いる満州族を「奴」と称する習慣も一六二〇年以後普及した。一六二一年、南京太常寺卿李維楨（本寧、一五四七—一六二六）は「そもそも奴酋が遼を手に入れたいと欲心を抱いているのは昨今のことではない」と記し、一六二七年に《全辺略記》を書いた方孔炤は一六一四年以後についての記事では満州族をすべて「奴」で表わしている。一六三四年刊の《古今議論參》③⑦⑨に収録された「遼議」で姚希孟は、撫順を陥落させて以来奴は既に一三年間国家の患となつてきたと述べ「私の思うには、奴を禦ぐことを願うなら先ず「我方の」人が奴を畏れないようにさせることだ。奴もやはり人なのである。彼（奴）は馬を恃みにしているが馬がつかずけばびっこも同様になる。弓を恃みにしているが矢が尽きれば手が曲つた病人になる」従つて火器の使用によつてこれらの奴の武器を役立たずにすればよいと説く。彼はさらに「必ず「我方の」人が奴を恨むようにさせるべきだ。奴は淫虐無比」であるから「寡人の妻」に暴行した上、「其の腹を剖き、其の脛を斬」ることを平然とやつてのけ、武器を棄て命乞いをする男に対してはあたかも「縛（鉄の塊り）をあやつつて朽れた蓼を引き抜く」ように命を奪う、「合計すれば一三年間に「奴が」殺した我「方の」人口はどうしてただ幾千万のみであらうか。」と満州族に受けた被害を強調している。また、陳仁錫は、「奴が我「方の」城を攻め落してしかも「落した城を」守らないのも深い事情があり、巧妙な策なのである。けだし奴衆が五万をこえていないのは間違いない。若し「奴が」城を得てすぐにこれを守れば地は広く兵力は分断される。それ故、獲得するとたちまち放棄するのは我「方」を敬愛するのでも我「方」を畏れるのでもない。まさに分「断されそうな兵力」を合「流しよう」とする計略なのだ、しかるに中国の軍人官吏

は「この事を」識らぬ。⁽¹⁵⁾と満州族の機動性を解説する。このような具体的な「奴」の行動分析は「小醜」の呼称と同じく、禁書著者たちが満州族のむきだしの力を恐れはじめ、そのために、より一層嫌悪感を強めたことを示している。奴の優勢を肯んぜず、「蓋し年を越さぬうちに西賊は殪れ、東奴は屈服するであらう」と「平夷賦」に記した黄道周や「奴に戦の才能があるのではない、中国の意気地なし」の程度⁽¹⁷⁾が未曾有なのだ」と述べた陳際泰たちも「制奴」の有効な方策を遂に見出し得なかったのである。以上の諸例から明末の禁書著者が満州族を蛮人視しつつ、その武力を恐れていたことが判明したが、実際に明朝を滅ぼしたのは異民族ではなく、「賊」「寇」と呼ばれる中国内部の叛乱勢力であった。だが、「寇」を誅すという名目で旧明官の先導を得てやすやすと長城内に入り、明朝の正統な後継者を自任して中華に君臨したのは、「大清」と号する曾っての「奴虜」たちであった。貪狼で残虐な野蠻人という満州族のイメージを書き続けてきた禁書著者たちは、華夷の地位の逆転を現実に見ていかなる反応を示したのだろうか。彼らの満人観に表われた新しい特徴はどのようなものであったろうか。

明朝が滅びて一五年と経たない順治年間に丁耀亢（野鶴、容城教諭）は《楊忠愍蟒蛇胆表忠記》⁽¹⁸⁾の中でオルドス地方の「西番」の言葉に託して次のように述べている。

勢圧中華。威傾方夏。駟鷹馬。醉擁琵琶。直、取、明、朝、駕。

十万貔貅夜渡河。駕蘭山外黑風多。自從奪卻陰山地。笑殺南朝曰講和。

俺乃西番小王子帳下。俺答是也。大元蒙古之後。世居西塞之辺。

自明朝土木一敗。天順北狩還朝。許俺通貢講和。

河套仍歸沙漠。近來牛馬蕃生。疆土漸広。控弦十萬。戰馬千羣。

俺国中有觀天象的。說王氣聚俺北方。不久該生聖人。入主中国。

他明朝邪臣乱政。失国不過百年。因此俺結連北辺河套一帶部落。將西辺辺牆尽行折毀。

勢力は中華を圧倒。中国の威は傾いた。鷹・馬を驅り、酔えば琵琶を抱く。まっすぐに明朝を取るのだ、馬をとばせ。

一〇萬の猛者が夜の渡河。馬をとばして蘭山の外、暴風ばかり。こっそり山地を奪い南朝が曰う講和を大笑い。俺は西番小王子の配下。そうだ。蒙古「大元」の後、代々西の辺塞に居る。

明朝は土木の変に一敗、天順帝が北伐・帰朝以來、俺「たち」に通貢を許し講和した。

河套はつまり沙漠。近來牛馬が繁殖し領地は拡大。射手は十萬、兵馬は千群。

俺の国の星占い師の言うには、王氣が北の方に聚っている、と。まもなく聖人が出て、中国へ入って君主になると。

かの明朝は悪臣乱政、国を誤まって一〇〇年と経たぬ。俺「たち」は北辺河套オールドス一帶の部落と結び、西の辺牆をみなやぶりこわしてくれる。

オールドスの北方に聚っている帝王の氣とは何を指すのか。于慎行は下巻に記す。「統一者たる王の礎が順治帝に帰し、天運は万年清朝を盛んにする。今まさに順治一四年、大清国聖明天子は筆を取り親しく表忠に序を題せられ天下に頒された。上帝は大いに喜ばれている。……」⁽¹⁹⁾ここには明朝の士大夫が決して書き得なかった、新しい満人觀が語られている。満州族は、悪政で滅びた明の後に大清国を建設すべく中国に來た北方の民族で、その長は上帝の意を享

けた聖人なのである。于慎行はオルドスの一軍人の口をかりて明朝の衰亡は早くから予見されたことであり中国は北方の王（満人皇帝）に治められる運命にあったと説く。禁書著者はここでは、異民族に征服された漢人士大夫の悲しみの表情を見せるよりも、スケールの大きな世界の中で中国もまた転変をたどることを当然のことと見做すたくましい現状肯定の態度を採っているのである。

禁書著者が、滅亡した中華を諦め満州族への恭順を示す為に、漢人たる我が身を異民族に置き換えた右のような例は珍しいが、当時の士大夫がこれまで満州族に蔑称を用いていたことに真正面から改悛を表わし「大清」と奉じるところを宣言するのは、つが悪かったであろうと思われる。そのうちで明臣としての経歴を有しながら清朝に仕えた「武臣」は社会的にはもっとも鮮かな転換をとげた士大夫たちであるが、彼らの中の禁書著者について満人観の変遷を探ってみよう。

まず文官武臣で死後禁書著者として清朝に最も敵視されるに至った錢謙益（前出、第一章第一節参照）の場合をとりあげよう。彼はまだ明末の一六三九年一〇月に故孫承宗（前出、第二章第二節参照）の奏議に序している、「ああ、わが国家（明朝）は中葉期に全盛であった。ついに奴酋による災難が生じたのは衰乱の不吉な兆候でないとはいえない。君位を保ち危難を安んじる人、故高陽公（孫承宗）のような人はどうして天から敦厚な性を受けて生まれた人でないことがあるうか。蓋し奴は撫順で兵乱を起して以来旋風飛火のような勢いで向かい近付くこともできず、広寧が陥ち、綏徳が潰え、寧遠前屯が焚え、宏大な帝業も権勢ある朝廷も岌岌と憂えた、」（まさにその時高陽公が山海関の守りに立った。）また徐石麟（宝摩、一六四五）の詩集に序して言う、「昔、唐代の天宝年間には戎羯の禍が有り、そして杜甫の詩が出た。元和年間には淮蔡の乱が有り、そして韓愈の詩が出た。宣孝章武年間における中興の盛世は、実は杜甫・

韓愈に鼓吹されたのだと説く人がいる。今、東夷が南寇し、王師は野に在る。醜類の游魂が将にわずかの間露払いをしてから先生の詩が運命に応じて出るのだ。⁽²¹⁾

このように満州族を蛮族として表現した錢謙益は、しかしながら一六四五年六月、南京を制圧した多鐸^{トクト}（予親王、一六二四—一六四九、奴兒哈赤の一五番目の息子）に迎降し叩首の礼をとり、銀壺・玉杯・金扇などを贈った。一六四五年—一六六三年の作品を取めた《牧齋有學集》⁽²²⁾④⑫で錢謙益は「前朝」の「崇禎先帝」「弘光皇帝（福王、朱由崧、一六四六）」を追懷しているものの《牧齋初學集》④⑫で満州族について用いた「奴」「東夷」「醜類」などの表現は一度も使っていない。

錢謙益のように、武臣となった禁書著者たちは決して明代に有していた満人觀を表面に出しはしなかった。むしろ積極的に「大清」を讃えた人々が少くない。武臣として活躍した江南出身の文人龔鼎孳（孝升、芝麓、端毅、一六一六—一六七三）は順治元年（一六四四年）末に早くも大清皇帝の「聖裁」を乞い、まだ自分の郷里近辺で遺王を擁した復明が画策されているにもかかわらず明朝を「先朝」と呼んでいる。また職掌柄、最大の敬意を払わざるを得なかった《龔端毅公奏疏》⁽²³⁾⑫においてのみならず、個人の作品集《定山堂詩集》③⑧⑨においても一六六一年、「朝廷は恭儉を尚び」、「陛下は真に聖く慈悲深く、人民はその寛大さを樂しむ」と順治帝の支配を賞讃している。前二者と共に江左三大家と呼ばれた呉偉業（駿公、梅村、一六〇九—七一）もまた《梅村詩集》⑦で「今、国家は朝代を改め瑞雲たなびいている。皇上は儒者に親しみ學問を重じておられる」と讃辭をつらねているのである。⁽²⁴⁾

但し、これらの表現が彼らの真の満人觀を示していたのかどうか、——むしろ讃辭を並べざるを得ない清官となつたが故に漢人としての彼らの意識はより一層屈折し、追懷・諦觀などの暗示的な手法によって異民族の支配された悲

しみを詠じるほかなかったと思われる。熊文舉（雪堂、一一六六九）は清代に入ってから（一二六五四年）編纂した《熊雪堂集》⁽²⁶⁾に一六三〇年に滿州族と明軍の攻防線となった「灤河」の詩を収める、

馬頭残月有余輝

馬上で見る月には余光が輝いている。

磧裏寒光臥鉄衣

河原には寒々とした景色、仆れ臥した鉄甲^{よろい}。

記得去年烽火急

おぼえている、去年は戦火が激しかった。

灤河春尽幾人歸

灤河の春が終って幾人が帰ったろうか。

滿州族に殺された多数の明軍將兵を熊文舉は滿人皇帝の臣下となった現在も決して忘れていなかった。彼はまた一六三九年に書いた「陝西郷試録序」をも収録する、「歳は己卯である、天下は復し大いに士を考査すべき時である、現在、天子（崇禎帝）が学を奮い賢業を興されて一二年になる。……今日、其の才を遁すことをはばからない者が有るだらうか。外禍は数十年にもなる、いったい人事はどうしたことか。内寇は十余年になる、人事はどうしたことか。⁽²⁷⁾」

熊文舉は明代に書いた詩文——天子は当然漢人皇帝で、内寇を叛乱勢力と見れば文中の外禍は滿州族の他になかった——を清代に入ってなお削除しないことによって民族意識を間接的に表現したのである。亡国の世に在ることの空しさは、滿人皇帝を讃えた吳偉業もこれを終生拭い得ず、同僚武臣孫承沢に贈る歌で「我が山を高からしめず、水深からしめず、鳥を飛ばしめず、魚を沈ましめざらんことを、⁽²⁸⁾」と詠じ、生き長らえて「清朝の」衣冠を得ても何の喜びもないことを表明している。

以上のように、清朝に仕えた禁書著者たちの滿人觀に明快さが欠けていたのに対し、終生「二朝を王と作さぬ」とを誓った「遺臣」の場合はその作品の中に新しい支配者たちへの不信感がはっきりと表われている。もともと、「生

きては明臣、死しては明鬼」となることを宣言し武力で抵抗した人々は清代に入って長くは生きていなかった。「虜を御する常道は、来れば懲らしめて禦ぐ、去れば備をかためて守る、「中華を」慕って貢物を献上すれば、応接してやり礼儀を厚くして譲り羈縻を絶やさぬのが一番良い」という班固（孟堅、三二九二）の言葉を尊重していた黄道周は、南下した清軍に幽閉され殺されたし、『兩粵夢遊記』の著者瞿式耜（起田、一五九〇—一六五〇）は武官武臣（孔有德、一六五二）の率いる清軍を大罵して殺され、儒家の劉宗周は杭州陥落の報と共に自殺（飢死）した。しかし剃髮して僧となり、或いは僻地に隠居し、或いは旅から旅へ放浪生活を送る読書人——例えば顧炎武（前出）、方以智（密之、曼公、弘智、無可、浮山愚者、藥地和尚、一六七二？）、屈大均（前出）たちの如く——の執筆活動にまで追求の手がのびることは一七世紀においては少なかつた。一六五五年序刊本である『西堂全集』⁽³⁰⁾の中で尤侗（展成、同人、一六一八—一七〇四）は次のように記している。「私が『この園の』賦を作ったのは甲申（一六四四年）の春の初めだった。うっかりして末語を識とした。北都の変についてはなにもまだ聞かなかった。其の明くる年、大兵が渡江したので私は倉皇として出奔した」⁽³¹⁾尤侗にとって「皇帝」は「北都の変」で亡くなった崇禎帝であつた。「我事未竟、非我死時也。」と自殺を否定し、他方では薙髮令に抗して剃髮した屈大均の場合は一層はつきりしていた。彼は決して「大兵」「大清」「清朝」「王師」などいわる隠当な字を用いなかった。従つて彼の作品で滿州族・滿人王朝に関する部分はすべて後世伏字になっている。彼は左懋第（仲及、羅石、一六〇一—一六四五）の殉死について次のように述べる、「左〔懋第〕公の事は漢の中郎將蘇武（子卿、一前六〇）と軌を一つにしている。蘇武は幸いにも、国を辱めないが為に死ぬ、ということにならずにすんだ。左公は不幸にして国を辱めない為に死んだ。〔左公に従つて死を選んだ副官の〕陳用極たちは、蘇武における『忠義の下臣』徐聖や趙終根といえようか。光祿大夫王忠における從臣馬宏といえようか。

彼らは皆悲憤慷慨し壯烈にも匈奴に屈しなかった。「彼らの」或る者は生還したが「生還が」素志でなかったことは分るはずだ。蘇武は、節を屈して命を辱しめるならどの面下げて生きて漢に帰れようか、と言った。洪範・紹愉の降伏は衛律・李陵と同一の罪を天に得たのだ。⁽³²⁾

屈大均は明朝の殉臣を漢の忠臣にたとえ、満州族を「匈奴」として表現した。このように満州族を歴史上の異民族に置きかえた上で不信心を表現する手法は清朝下に生きる禁書著者たちに踏襲された。呂留良（前出、一六二九—一六八三）は《八家古文精選》⁽³³⁾③④において蘇洵（明允、老泉、一〇〇九—一〇六六）の「審敵論」をとりあげる。「匈奴の力は辺境を侵犯するに足りるけれども、ここ一〇数年間是我方は辺境を犯される心配をきつと持たずにいられよう。それは何故か。〔匈奴が〕我方を畏れているからではない。〔匈奴の〕志は辺境を犯すだけではないからだ。志は辺境を犯すだけではないがまた力もしたいと望んでいることを成しとげるには未だ不足している。だから〔匈奴は〕心ではただ我方から一度絶交されて我方の厚賂を失うのを恐れているのだ。然るに〔匈奴〕が驕り傲ぶって少しも屈服しようとせぬのは何故か。其の意向は我方をはかりにかけて後に態度を固めようとしているのだ。⁽³⁴⁾」呂留良はこの文章に傍点を施した上、原文「驕傲不肯少屈」の横に「さらに転じて其（匈奴）の狡猾な情を〔表現し〕尽している」と記している。⁽³⁵⁾ 蛮族が驕り高ぶるその態度の裏には常に隙をうかがう狡猾な性質があることを主張したのである。呂留良が原作者の論旨に密着した外夷観を有していたことは、彼が蘇洵の提案する禦敵の方法——賂の禁止——に賛意を表明し、匈奴の勢力を確かめなくては遠い将来外禍が生じるだろうという指摘を「從來の謀国者の情状を尽している」と賞めている点からも明らかである。呂留良の異民族への不信心はどこから来ているのか。彼はさらに蘇軾（子瞻、東坡、文忠、一〇三六—一一〇一）の「策断」の文を取り上げる、「そもそも蛮夷は力で以って攻め、守り、戦う。顧みて

力が充分ではない場合には逃げる。中国はそうでない。形を以って守り、勢を以って攻め、氣を以って戦う。⁽³⁶⁾中国は戦う際にも「法」を以って行う。すなわち「城郭を築き、塹濠を堀り、穀倉を大きくして官庫を満たし、照明を灯し、斥候を遣わし、民に鐘と太鼓で移動や停止の時を知らせ、勝ってもわれがちに進まず、負けてもわれさきに逃げない⁽³⁷⁾」という戦いの「法」を守るのである。これに対して「匈奴」「胡人」は「無法を以って勝」ち「勢いに乗じて」中華を侵すのである。

「無法」は「蛮夷」の天性である、と呂留良は考える。曾って契丹人は豊麗な中原・莊重な朝廷宮殿に感嘆し、中華の風習を採り入れようとした。官制、礼制、科挙制等の他衣食まで模倣した。ところが契丹では父子が暮らすのに、若者を貴び老人を賤しむ。獲得したものを貪ぼり、失ったものを忘れる。勝って譲りあわず、敗けて助けあわない。このような点は一向に直らなかつた。呂留良は蘇軾の原文「其の中味は未だ犬羊豺狼の性を革めることができないのに外面は華人の法に牽かれる」⁽³⁸⁾に強調の傍点を施し、「蛮夷」が中国の「法」を用いても結局は「無法」にしか安住できないとの見解を披瀝しているのである。

以上のように一六世紀に成立した満人観は、清朝支配下の一七世紀後半に至っても禁書著者たちの自由な思考活動によってなお原型を保っていた、ということが出来る。禁書著者たちが、筆禍の可能性をも省りみず、異民族への違和感、不信感を表明し続けた真の理由は何だったのだろうか。私たちは次節において反満意識の構造そのものを検討することにしよう。

(1) 「臣聞建州女直東夷猾虜、食肉衣皮山居林处藉弓矢、以憑陵恃山林之險阻。其心狡黠、其力強固、蛇突豕奔来忽去。」
趙輔撰《平夷賦》一卷、紀錄彙編卷之三九所収、三b

- (2) 「遼東先年、因三衛內附東夷効順故、於広寧開原、奏立馬市交易。當時虜囚輸款時以馬易塩米。彼得食用之物、我得攻戰之具。近賊虜狡黠、不堪用馬匹貨売。持以入市者惟榛・松・貂・鼠・瘦弱牛馬而已。」《全遼略記》前出、卷一〇、一二b—一三a
- (3) ……以為「近日諸虜解讎結好、更入迭出罷我、奔命且進退分合頗有紀律、而又納我通人巧為間諜、混迹市廛至窺京甸。」《昭代經濟言》前出、卷一一、皇明北□考序、一三b
- (4) 「夫虜夷瞰我備邊虛衷、以為向背。或陰附強寇而肆撓擾。或竄于飢寒而掠我騎畜。急逐之則遁去。少緩之則復來。乃其狡猾素性也。」《古今議論參》前出、卷四八、一三b
- (5) 「虜有狡心、必不以夷而以疑。」袁黃撰、袁儼注併撰《統群書備考》六卷統二三場群書備考三卷、万曆中刊本、統卷三、二〇a
- (6) 「夫虜悍而我怯、虜輕死而我重生、虜趣利專而我懸賞慙、虜所得幽獲、因以予之得人即予以為奴婢、其戰則人人自為趣、見敵逐利如鳥之集、而我之御士卒、則至不得宿飽、隔歲之餉尚弗得全支、而欲其力殉、以摧餓虎之喙也。」文翔鳳撰《皇極篇》二七卷目三卷、明刊本、卷八、建都禦邊策、一三三b
- (7) 其國王提兵三万、親至義州、「欲以助中国而殲小醜。」張鼎撰《遼籌》二卷附遼夷略一卷陳謠雜詠一卷、景明刊本、玄覽堂叢書所收、遼籌、卷一、四a
- (8) 「以蠻夷制蠻夷計、無善于此。」同右、六a
- (9) ……是故、「善為中国者以虜攻虜、而後全制虜也」。善為虜者以中国攻中国、而後全制中国也。《昭代經濟言》前出、卷五、備虜、一b
- (10) 「今上天啓之辛酉、東師敗績、天下岌岌然憂兵」。「今東夷小醜乘虛襲狂」。《武備志》前出、武備志序(郎文暉)、二b—三a
- (11) 「夫奴曾觀親遼、非一日、已併毛憐諸衛、取其勒印、又割海西之半、……同右、武備志叙(李維楨)二b—三a
- (12) 「愚以為、欲禦奴、先使人不畏奴。夫奴亦人也。彼恃馬、馬蹶則為跛蹶、恃弓、矢竭則為擧拳。」《古今議論參》前出、卷四八、二六a—b

(13) 「奴既淫虐無比」，寡人之妻弗論，裸而狎之如塵聚然，……不旋踵而「刳其腹斷其脛」，……癡男子投戈解甲，長跽請命，「如摻鐔而鐔朽蓼」，一揮刃則實元者千計……同右，二六b—二七a

(14) 「計一三年間殺我生齒，不啻幾千萬。」同右，二七a

(15) 「奴之剋我城而不守也，情之深而策之巧也。蓋奴衆不越五萬。若得城即守，則地廣而力分。故旋得旋棄者，非愛我畏我也。正以分為合之計，而中國之將吏不識也。」同右，一八a

(16) 「蓋不踰年，而西賊殲，東奴服」。戶咸自在，城皆安樂。……鄭元勳輯《媚幽閣文娛》不分卷，中國文學珍本叢書第一輯所收，平夷賦（黃道周）p. 5

(17) 「奴非能戰也，而中國之怯弱則從古未有是也。」《古今議論參》前出，卷四八，一〇a

(18) 丁耀亢撰《重刊楊忠愍蛇胆表忠記》二卷，同治一年崇文書局刊本，上卷，一九a—b

(19) 「一統王基歸順治，万年天運壯清朝。今當順治一四年。大清國 聖明天子御筆親題表忠御序，頒行天下。上帝大喜。」同右，下卷，六〇b—六一a

(20) 「嗚呼，我國家中葉全盛，乃有奴酋之難，不可謂非孽亂兆衰之會，而保大定傾之人，若故少師高陽公者，豈非天之所篤生也。與蓋奴自撫順弒難，勢如旋風煙火，不可嚮邇。広寧陷振武潰寧前焚，拳四海之大，九廟之重岌岌乎」，「寄命于堵墻，公于斯時以文學侍從之臣，自謂當辺閼。」《牧齋初學集》前出，卷三〇，少師高陽公奏議序，一b

(21) 「昔者有唐之世，天寶有戎羯之禍，而少陵之詩出，元和有淮蔡之亂，而昌黎之詩出，說者謂，宜孝章武中興之盛，杜韓之詩，實為鼓吹。今東夷南寇，王師在野。游魂醜類將取掃除，而先生之詩應運而出。」同右，徐司寇画溪詩集序，一七a

(22) 錢謙益撰《牧齋有學集》五〇卷，景上海涵芬樓康熙甲辰初刻本，四部叢刊集部所收

(23) 龔鼎孳撰《龔端毅奏疏》八卷附一卷，光緒九年一四世孫彥緒聽彝書屋重刊本

(24) 《定山堂詩集》前出，卷二，辛丑二月一日恭誦，詔諭恩錫新加練餉感恩紀事，二二a—b

(25) 「今 国家鼎新景運、皇上親儒重學、」《梅村家藏稿》、前出、卷二七、三 a

(26) 熊文舉撰《雪堂先生集選》一四卷、順治一二年序刊本、卷五、七 a

(27) 「歲在己卯、天下復當大比士、是時天子奮學興賢業十二年於此矣。……有忍通其才於今日者乎。外禍數十年此何人事、內

寇十余年此何人事。」同右、卷七、二四 a—二六 b

(28) 「……衣冠只如此、」《使我山不得高、水不得深、鳥不得飛、魚不得沉。》《梅村家藏稿》前出、卷一一、八 a

(29) 「御虜之常道、來則懲而禦之、去則備而守之。其慕而貢獻、則接之如禮讓羈縻不絕。」黃道周撰《羣書典彙》一四卷、崇

禎一六年序潭陽余氏散古堂刊本、卷九、制辺、四六 a

(30) 尤侗撰《西堂雜組》一集八卷二集八卷三集八卷詩集三三卷即西堂全集 清刊本

(31) 「予作賦時在甲申之春初、不覺末語為識也。亡何北都之變聞矣。其明年大兵渡江予倉皇出奔。」同右、《西堂雜組》一集、

卷一、五 a

(32) 「左公之事、与漢中郎將蘇武一轍。武幸而不死以不辱国。左公不幸不生不辱国。若陳用極等、其武之徐璽、趙終根歟、光

祿大夫王忠之馬宏敷。彼皆慷慨壯烈、不屈匈奴。雖或生還、而非其志可知也。武曰、屈節辱命、雖生何面目以歸漢乎。洪範紹

愉之降、其与衛律李陵同一罪於天者哉。」《明季南都殉難記》前出、五一—五二 p.

(33) 呂葆中撰《晚邨先生八家古文精選》八卷、康熙四三年序刊本

(34) 「匈奴之力雖足以犯辺、然今十數年間吾可以必無犯辺之憂、何也。非畏吾也。其志不止犯辺也。其志不止犯辺、而力又未

足以成其所欲為、則其心惟恐吾之一旦絕其好、以失吾之厚賂也。然而驕傲不肯少屈者、何也。其意曰邀之而後固也。」同右、

蘇文精選、蘇洵、一九 b

(35) 「又輒以尽其狡猾之情」同右

(36) 「夫蠻夷者、以力攻、以力守、以力戰、顧力不能則逃。中国則不然。其守以形、其攻以勢、其戰以氣。」……同右、蘇文

精選、東坡、六四 b

(37) ……是故精修其法而謹守之。「築為城郭、塹為溝池、大倉廩、實府庫、明烽燧、遠斥候、使民知金鼓進退坐作之節、勝不相先、敗不相棄。」此其所以謹守其法而不敢失也。同右、六二 b

(38) 「其中未能革其犬羊豺狼之性、而外牽於華人之法。」同右、六三 b